闇夜の友愛

白黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜の友愛

【Ｎコード】

Ｎ２７４３Ｘ

【作者名】

白黒

【あらすじ】

うちはサスケに憑依した主人公。主人公はうずまきナルトと日向ヒナタの幸せの為、色々な事をする。サスケとナルトとヒナタはスレます。三人は里の為でなく自分達の為に動きます。シリアスでダークに書いていくつもりです。

スレた者の憑依（前書き）

物語の始まり・・・

スレた者の憑依

俺の名は・・・いや、前世の名はいらないな。
今の俺の名は“うちはサスケ”。
木の葉の名門うちは家の人間だ。
ここまで聞けば分かる者はいるだろう。
ここはＮＡＲＵＴＯの世界だ。
まず、何故俺がサスケなのか答えよう。
多分分かっているだろうが俺はサスケに憑依している。
俺の前世はＮＡＲＵＴＯが好きな擦れた人間だ。
子供の頃、親や同級生から苛めにあいそれが原因で誰からも信頼せず体を鍛え暴走族になった。
しかし、子供の頃からアニメや漫画が好き・・特にＮＡＲＵＴＯが好きだ。
その為俺が所属する暴走族は俺と同じような擦れた人間ばっかりの暴走族だ。
俺はいつものようにバイクに乗り駆けていた。
しかし、俺は交通事故にあい重症を負った。
病院に輸送されたが程なく死んだ。
俺は何故か黒い空間にいた。
そこで神と名乗る奴と出会った。

「私は神だ。本来君は死ぬ必要はなかった。私のせいで死なしてしまった。本当にすまん。」

どうやら俺は神の手違いで死んでしまったようだ。
「お詫びとして君に力を与えて新たな生を受けるがいい。何処の世界がいい？」
俺はそれを聞き、ＮＡＲＵＴＯの世界に行きたいと答えた。
力は、うちはサスケになりたいという事とチャクラを増やして欲しい事さらに写輪眼の失明を無しにしてもらう事を頼んだ。
神は了解してくれた。
そして、世界に飛ばされた。
世界に飛んだ俺はうちはサスケとして生を受けた。

うちはサスケとして生まれて早二年の時がたった。
俺はこの世界で生きる為、色々な訓練をした。
まず覚える事はチャクラを使えるようにする事だ。
死ぬ思いを沢山し、チャクラを使えるようになり写輪眼も習得できた。
これを知っているのは兄である“うちはイタチ”のみ。
兄に知られた事により、俺は兄と訓練をする事になった。

さらに二年がたち、俺は森の中で訓練をしていた。

その時、何か声が聞こえた。
気になった俺は聞こえた方に行った。
そこで見たのは、三人のガキに苛められていた“うずまきナルト”と“日向ヒナタ”だった。
俺は二人の前に現れ立った。

「な、なんだよお前は！？」

「・・・うちはサスケだ。弱い者苛めして楽しいか？楽しいのであれば俺にも味わらせてくれ。貴様らでな！」

俺はナルトとヒナタが好きなキャラだ。
だからそんな二人を苛めたこいつらは許せん！
俺は三人のガキをボコボコにしてやる。
ガキどもは泣きながら逃げていった。

「よお、大丈夫か？」

「う、うん。大丈夫。」

「俺も大丈夫だ。」

俺はナルトとヒナタに挨拶をした。

「俺はうちはサスケ。二人の名前は？」

「うずまきナルト。」

「・・・日向ヒナタ。」

これが、俺とナルトとヒナタの出会いだ。
そして、この出会いから俺の物語は始まる。

スレた者の憑依（後書き）

ＮＡＲＵＴＯのシリアスでダークな物語の始まりです。
次回は二年後の話です。

信頼する者達（前書き）

出会った者達は物語を紡ぎ始める。
しかし、これはまだ序章・・・

信頼する者達

サスケはナルトとヒナタの二人と仲良くなった。
あのあと、日向の護衛役の人間が現れヒナタを連れ帰った。
その時のヒナタを見る表情は何とも嫌そうな顔をし、なんでこんな小娘をという感じだった。
そして、ナルトを見る目は里の奴等と同じ嫌悪の目付きだった。
サスケは、羨ましそうな顔だった。
だが、サスケはそんな護衛役を見もしない。
次の日、サスケはナルトとヒナタをイタチの前に連れて来た。

「サスケ。この二人は？」

「兄さん。こいつらは昨日ある森で苛められていたのを助けたんだ。連れてきたのは何となくだ。」

ナルトとヒナタはイタチを見て怯えている。

「・・・二人共、名前は？」

「そういえば、名前を言ってなかった。二人共、俺はうちはサスケ。」

「サスケ。名前くらい言わなきゃだめだろ。俺はうちはイタチ。こ

のサスケの兄だ。」

サスケとイタチは名前を言う。
それを聞いたナルトとヒナタも名乗る。

「うずまきナルト。」

「日向ヒナタです。」

「日向？なるほど、その目は確かに。（それにこの少年があの九尾を宿した・・・）」

イタチは名前を聞き、すぐに理解した。

「それでサスケ。この二人を連れてきた理由はなんだい？」

「・・兄さん。二人を鍛えてくれないかな。俺も手伝うから。」

「何？」

ナルトとヒナタを鍛えてくれ・・・それを聞き、イタチは驚く。
何故なのかわからない。

「理由を聞いても。」

「昨日二人が苛められていてそれで、それと日向ってうちはと並ぶ名門だろ？なのにヒナタの護衛役の人かな。そいつがヒナタやナルトを見る目がムカついたから。」

「・・・なるほど。」

サスケの解答を聞き、イタチは納得した。
しかし、問題があった。
「ナルト君を鍛えるのは問題ない。だが、ヒナタちゃんはさすがに問題がある。」
何故ヒナタに問題があるのかというと彼女は名門の子だ。
いくら鍛えるにしも名門の子を勝手に鍛えていいか難しい。
ナルトも本当は問題はある。
ナルトは腹の中に九尾がいるのだ。
普通はかなり危険だ。
しかし、イタチはナルトをこの目で見て危険はないと判断した。
「あ、あの！」
「？」
「お、お願いします。わ、わたしを鍛えてください！」
「・・・いいのかい？」
「・・・お願いします。わたし、父上にみんなに見てもらってくれない。みんなわたしの存在が邪魔見ないに邪険にする。わたしはそんなの耐えられない。見返したい。父上をみんなを見返したいんです！お願いします！わたしを鍛えてください！」
ヒナタの心の奥底にある本心を言葉にした。
それを聞き、サスケ達三人は驚いた。
ヒナタがまさかこんなにはっきりと言うなんて思わなかったようだ。

「・・・わかった。ヒナタちゃんがそれを望むなら鍛えてあげよう。」

「はい！」

こうして、ナルトとヒナタはサスケとイタチに鍛えられる事になった。

さらに二年の月日が流れた。
サスケとナルトとヒナタはかなり修業し鍛えられ暗部クラスの強さになった。
イタチは暗部となり木の葉の為に働く。
そんな中、ナルトとヒナタの性格が変わった。
ナルトはサスケのおかげで体内にある九尾と出会う。
さらに父の波風ミナトと母のうずまきクシナと出会った。
ミナトとクシナ、さらにサスケのおかげでナルトは九尾を御せるようになった。
しかし、それが災いしてナルトは里が何故自分を毛嫌いするのか知った。
それを知ったナルトは里の人間達を嫌い、サスケとヒナタとイタチしか信頼できなくなった。
ヒナタは本当に強くなった。
だが、偶然ヒナタは父の日向ヒアシが自分を既に見限っている事を言っていたのを聞いてしまった。
さらに、一年前に妹の日向ハナビが生まれ、ヒアシはヒナタを分家

の人間に嫁がせようと画策しようと考えているのを知った。
簡単に言ってしまえば売婦扱いである。
そのことに気付いたヒナタは日向に絶望し完全に毛嫌いした。
ヒナタの性格は変わりおどおどした感じは消え冷静な感じに変わり
ナルトと同じようにナルト達三人しか心を開かないようになった。
しかし、良い事もある。
ナルトとヒナタが恋人同士になった。
何故かはわからない。
恋や愛とはそんなものだ。
サスケとイタチは二人を祝福した。
六歳となったサスケとナルトとヒナタはアカデミーに通う事になった。
しかし、三人にしたらつまらないの一言である。
サスケ達は力を押さえてる為、かなり疲れるようだ。
アカデミーに入り数週間がたったある日、イタチはうちは一族から疎外された。
ある理由でイタチはうちは一族からの命を受けなかった。
しかし、そんな中サスケだけは両親に内緒でよく話していた。
二日後、サスケとナルトとヒナタはイタチにある事を頼もうとしていた。

「どうしたサスケ？俺に頼みたい事というのは。」

「兄貴、実は三人で決めたんだ。俺達を暗部に入れてくれないか？」
サスケがそう言った瞬間、イタチの目は見開いた。
まさか、三人が暗部に入りたいなんて思わなかったからだ。

「サスケ、ナルト、ヒナタ、お前達の気持ちはわかった。しかし、
サスケはともかくナルトとヒナタは里が日向が嫌いだろ。なのに二

人は里の為に動くのかい？」

イタチの言い分にも理がある。
ナルトは里嫌い、ヒナタは日向嫌いだ。
それなのに里の為、日向の為に動くなど考えられないのだ。

「もちろん俺は里の人間どもが嫌いだ。別に俺は里の為じゃない。俺自身のためにヒナタのためにサスケのために力を生きるすべが必要だ。だから暗部に入ってさらに力を付けたいんだ！」

「わたしも日向のためじゃない。わたし自身のためにナルト君のためにサスケ君のためにわたしはさらに力がほしい。だからお願いします！なんとか暗部に入れてください！」

イタチはナルトとヒナタの入る理由を聞き、思案する。
二人はサスケと同じくらい大切な弟と妹みたいなものだ。
暗部に入れてもいいと感じてしまう。
しかし、暗部は危険な任務が多い。
簡単に入れていいものか。

「兄貴、二人の決意は高い。俺も暗部に入って二人を助けたいし俺自身も、もっと強くなりたい。だから・・・頼む！」

サスケは頭を下げる。
サスケに習ってナルトとヒナタも頭を下げる。

「・・・ふぅ。わかった。俺が何とかして火影様に取り付くってもらおう。」

三人の熱意に負け、イタチは三人を何とか暗部に入れるよう火影に

頼む事にした。
三人は喜びイタチに礼を言った。
次の日、イタチは火影に三人を暗部に入れてもらうよう頼みこんだ。
火影は最初は渋ったが三人の根気に負け暗部入りを許可した。
三人は晴れて暗部入りした。
ただし、これを知るのは極一部しか知らない。
そして、遂に始まる・・・うちは一族の滅亡が・・・・・イタチの
手によって。

信頼する者達（後書き）

三人はスレる。
里に、名家に、家族に、絶望してスレた。
スレた三人は闇に溶ける。
次回はうちはの滅亡・・・

悲劇・・転機の始まり（前書き）

悲劇が起ころうとしている。
しかし、三人にはどうでもいい事。
だが、これが新たなる道なのだ。

悲劇・・転機の始まり

サスケ達三人が暗部に入り数日がたった。
サスケ達三人は危険な任務をチームで組み、戦闘経験を積んでいく。
初めて人を殺した時は多少の嘔吐感とそれ以上に自身の奥底にある高揚感に襲われた。
数回の任務をこなしている時、サスケに万華鏡写輪眼が開眼した。
言い忘れていたが、サスケはすでに四歳の時に写輪眼を開眼していた。
サスケに万華鏡写輪眼が開眼した事を知ったイタチは驚愕した。
もちろん、どうしてと聞いた。

「わからない。俺の写輪眼は異質なのかもしれない。」

そう言い、イタチを納得させた。
それからさらに数日がたったある日。
それは満月がよく見える日の夜だった。
その日、うちは一族がある人物により滅亡した。
滅ぼした人物はイタチだ。
イタチがうちは一族を滅ぼしたのだ。
イタチは里から出ようとしていた。

「兄貴。」

「！！・・サスケ。それにナルトとヒナタ。」

その時、暗部の任務を終え帰還する途中のサスケ達三人と出会った。

「イタチ。その血は？」

「・・・その血、うちは一族ですね。」

イタチは三人に気付かれ困り果てた。
しかし、どうせばれるのだ。
なら、ばらす事を決意した。

「そうだ。俺はうちは一族を滅ぼした。里のために・・俺は・・・」

「そうか。兄貴、それが兄貴の選んだ道なら俺は何も言わない。」

「・・・すまない。」

イタチは改めていい弟を持ったと自覚した。

「イタチさん。すみませんが貴方の目を見させてください。」

「何？」

「もしかしたら、イタチさんの目が失明する可能性があります。そうならないようにわたしがあなたの目を治します。」

「！！知っていたのか。」

イタチはヒナタが自身の目が失明を始めたのを知っていたのを驚い

た。

「知ったのはほんの偶然です。お願いです。治療させてください。」

「しかし。」

「心配しなくていいぜイタチ。ヒナタは医療忍術も学んでんだぜ。しかも腕は一流だ。絶対に治してくれる。」

イタチはサスケを見る。

サスケはうなずく。

「・・・わかった。頼むヒナタ。」

ヒナタはうなずき、すぐさまイタチの両目の治療を開始する。

数分後、治療完了した。

「どうですか？」

「・・・良好だ。今まで見えずらかったがよく見える。感謝する。」

イタチは感謝の礼を言い、里から去った。

サスケ達三人はイタチを見送ったあと火影邸に任務報告を言いに行く。

部屋に入り、並んで立つ。

「火影様。任務報告しにきました。」

「うむ。ご苦労じゃったな。・・・サスケよ。」

「はい。」

「実はのぉ・・・」

「兄貴がうちは一族を滅ぼした事ですか？」

「！！なんで知っておるのだ！？」

「帰還する途中に兄貴に会い聞きました。」

「そうか。」

火影は目を閉じる。
火影はサスケがまさかイタチに賛同するのではないかとヒヤヒヤしている。
しかし、サスケからはそんな感じが全然ない。

「心配するな。俺は別に兄貴をあとを追う気はない。俺には俺の道がある。だから、安心しろ。」

「・・・うむ、分かったのじゃ。ナルトとヒナタはどうじゃ？」

火影はナルトとヒナタにも聞く。
一応、イタチはナルトとヒナタの師なのだ。

「安心してくれじいちゃん。俺はヒナタがいればいいんだ。だから行く気はない。」

「わたしも同じです。ナルト君がここに残るのなら残ります。」

「・・・分かったのじゃ。」

火影はホッとした表情になる。

「ふん、相変わらず甘いなヒルゼン。」

扉の方から声が聞こえた。
三人は振り返ると、一人の老人が立っていた。

「ダンゾウ・・・」

志村ダンゾウ・・・暗部を育てる組織『根』の創設者で凄腕の忍。
かつては三代目と火影をかけて対立した事がある。
しかも同期。
サスケは何故ダンゾウがここにいるのか分からなかった。

「ダンゾウ、何しにきたのじゃ。」

「ふん。イタチがあのあとどうなったか気になってな。」

「・・イタチならすでに里から去ったわ。この子達が目撃しとる。」

ダンゾウがサスケ達三人を見る。
今見たという感じで。

「ほうっ、まさかイタチの弟に九尾の小僧、おまけに日向の落ち零れか。」
（ふむ、情報とはかなり違うようだな。見たところ九尾の小僧は九尾をコントロールしとるようだし、日向の落ち零れもかなりの手だれだな。）

ダンゾウは見下した目でみているが、内心では、三人の強さに気付く。
サスケ達三人もダンゾウの奥底にある目に気付いた。
「何故こやつらがここにいる。それにその格好・・暗部か。なるほど、最近小さいながら強い暗部が三人ほど現れたと聞いたが、まさかこいつらだとはな。」
サスケ達三人はダンゾウの言葉を無視する。
「ダンゾウ、貴様に三人を殺らせん！もし殺るというなら！」
「安心しろヒルゼン。そこにいる三人を殺る気はない。わしはイタチの事を聞きにきただけだ。用事はそれだけだ。」
火影はダンゾウに殺気をぶつけるが、ダンゾウは何事もなかったのように自分がここにきた理由を言い部屋から出る。
「・・・ふう。すまんな、もういいぞ。任務報告はすんだ。今日はもう帰ってもいいぞ。ただし、サスケにはどこか住む場所を与えんとな。」
「わかりました。それはまた今度にお願いします。それでは。」
「うむ。」
サスケ達は部屋からでる。
少し歩いたあと、サスケはヒナタを見る。

「ヒナタ。ダンゾウがどこに行ったか分かるか？」

「（こくっ）・・白眼！・・・地下にいる。少し遠いけど。」

「どうするんだ？」

ナルトはサスケが何故ダンゾウを探してほしかったのか気になった。
ナルトからしたら、あいつは嫌いな部類だ。
自分を道具扱いする目だ。
何故そいつを？

「あいつは暗部を育てる根の創設者だ。あいつなら俺達をさらに強くしてくれるはずだ。だから、奴に頼もうと思う。」

「でも、そんな事をすればわたし達あいつに利用されちゃうかも。」

「もちろんそうだろうな。だが、俺達もあいつを利用してやるんだ。俺達が生きる為にも自由を得る為にもな。」

もちろんサスケはそれ以上の事も考えている。
自分達がダンゾウに取り入れる事ができれば今後の行動範囲が広くなる上戦闘経験も増えるはずだ。
だからなんとしてもダンゾウに取り入る必要があるのだ。

「わかった。そこまでいうなら俺は付き合うぜ！」

「わたしも！」

「決まりだな。」

サスケ達はダンゾウがいる場所に行く。
トラップやダンゾウお抱えの暗部と戦ったりしたが、なんとかダンゾウのところに到着した。

「ふむ。誰が侵入してきたのかと思っていたら貴様らだったとはな。で？一体なんのようだ。わしを殺しにきたのか。」

ダンゾウは油断もなく構えながらサスケ達に話かける。

「安心しろ。アンタを殺る気はない。俺達がアンタに会いにきたのはただ一つ、俺達をアンタの部下にしてくれ。」

ダンゾウの目が微かに動く。

「どういう事だ？何を考えている。」

「正直に話すと俺達は里の事なんかどうでもいい。しかし、俺達が生き延びる為にもどうしてもいろんなところのパイプが必要なんだ。そこで、アンタのような裏に精通で権力も高い奴の下についたほうがいいという事だ。」

サスケは多少の嘘をつき取り入れるよう説得する。
ダンゾウはサスケ達を舐めまわすように見る。

「・・・ふむ、よかろう。そこまで言うなら今日からお前達はわしの部下だ。」

ダンゾウの言葉にサスケはニヤッと薄く笑う。
これでサスケ達はダンゾウというパイプを持つ暗部になった。

悲劇・・転機の始まり（後書き）

三人はさらに深き闇へと落ちる。
それでも三人の思いは消えない。
変わる事もない。
次回は二人の死・・・

表での死（前書き）

繋がりを絶つ簡単な方法・・・それは死。

表での死

うちは一族が滅亡してから数日がたったある日、ヒナタのこの一言から始まった。

「わたし、日向から抜け出したい。」

ヒナタのいきなりの言葉にサスケとナルトは目をパチクリさせる。

「急だな。どうしたんだ？」

「だってこれからの事を考えるとどうしても日向が邪魔なんだもん。どうにかして日向から抜け出さないと。」

ナルトが聞くとヒナタが日向ともう繋がりたく無いと言う。
サスケはどうしようか考える。
確かに今後を考えるとヒナタは日向の為と称された行為を受けなければならない。
それを考えると確かに繋がりは絶ったほうがいい。

「どうする？サスケ。」

「・・・火影に言っても期待は薄い・・・っとなると奴だな。」

「奴・・・もしかしてダンゾウ？」

「正解。」

サスケはダンゾウに聞く事にすると言う。
ナルトとヒナタはさすがにどうかと思った。

「確かにダンゾウに頼むのはシャクに障るが、今のところこいつに聞く以外に手は無い。」

そう言われてナルトとヒナタは仕方ないといった表情になる。
言われてみれば確かにダンゾウ以外に適任者がいない。

「そういう事だ。さっさと行くぞ。こういうのは早く済ませるのに限る。」

そう言い、サスケ達はダンゾウに会いに行く。

「っで、このわしになんのようだ。」

「ダンゾウ・・・アンタに頼みたい事がある。」

サスケはヒナタが日向から抜け出したいとそして、その為にはどうしたらいいかと言う。

「・・・なるほどな。」

「どうしたらいい。」

ダンゾウは少し思案したあと思いもしなかった解答を言う。

「・・・簡単だ。死ねばいい。」

「「「・・・は？」」」

死ぬ・・・いきなりの死ぬと言われ困惑した。

「どういう事だ！てめえダンゾウ！ふざけた事ぬかすと九尾を開放するぞ！」

「またナルト。ダンゾウの事だ。なにか考えがあるのだろう。違うか？」

ナルトは怒り突っ掛かるがサスケが制す。
サスケはダンゾウの考えが読めてきたようだ。

「その通りだ。日向ヒナタ、お前は日向の鎖から逃れたいのだろ？」

「ええそうよ。」

「だったら簡単だ。死んだ事にすればいい。」

「なるほど。そういう事か。」

「物分かりがよくて助かる。要するに、表立って死んだ事にすれば日向との繋がりは断ち切れる。」

簡単に言えば、暗部に属する日向ヒナタは生きているが、日向家の

娘日向ヒナタは死んだという事にする。
分かりやすくいえば表のヒナタは消えるという事だ。

「さすがはダンゾウ、大した策だ。しかし、問題がある。死体はどうするんだ？」

「心配はいらんだろ。日向ヒナタの死体を探さんだろ。他の忍はともかく、日向が探すふりをしてきりのいい所で捜索を中止するだろ。」

ダンゾウは日向がヒナタをどうみてるかよくわかる発言をする。
ヒナタは不機嫌になるが、ダンゾウの策に賛同している。

「決まりだな。」

「なあ、この際俺も死んだ事にしてくれねえかな？」

「俺もそうしたいが、さすがに俺が死んだとなれば、怪しまれるからな。俺は無理だな。」

「うずまきナルトが死ぬのは構わんが、同時期だとまずい。時期をずらしてから死ぬ事にしろ。」

「わかった。」

「それじゃあ、作戦実行だな。善は急げだ。」

サスケ達はダンゾウの策に乗る。
こうして、日向ヒナタの死・・・作戦名『ヒナタ表死（ひょうし）』が決行された。

次の日、里中に日向ヒナタが死んだという事件が広まった。
死んだのは自殺だとか事故死だとか他殺だとか噂が飛び交う。
日向はヒナタの死体捜索をするが、案の定僅か三日で捜索を止めた。
そしてその日、日向家では宴会が行われていた。
これを知るのは、サスケ達と根に属する暗部のみ。
それから数日がたったある日、ナルトが死んだ。
もちろん、この死は偽装だ。
この死も里中に広まる。
ナルトの死は里中の人間達は喜んだ。
あの化け狐が死んだっと言い合い喜びはてには里中で密かに宴会をやる所があるくらいだ。
ナルトには捜索すらなしだ。
怪しいと踏んだ火影は密かに調査をする。
その後、サスケ達を見つけ真実を知った。
理由を聞くと文句を言ったがすぎてしまったのでどうしようもなかった。
こうして、ナルトとヒナタは表では死に裏へと徹することになる。

表での死（後書き）

二人は表から消え、裏で生きる事を決意。
自由への道がまた一歩進む。
次回は原作開始・・・

＊次回から前書きと後書きにメインキャラとオリキャラのプロフィールを一人づつ書いていきます。

原作の始まり（前書き）

うちは一族の滅亡から六年がたった。
ついに物語は始まる。
原作とは徐々に変わっていく。

うちはサスケ（暗部名、黒鬼）

ＣＶ中村悠一

容姿・・長髪の黒髪。服装は仮面ライダーカブトのやさぐれた矢車の服装。

性格・・表、明るく真面目。誰とも仲良くなれる優しさがある。
　裏、冷酷で情け容赦がない。敵には容赦なく、一瞬で殺す戦いをする。
　素、冷静でナルトとヒナタと兄イタチ以外にはぞんざいな扱いをする。三人以外はどうでもいいと考えている。ナルトとヒナタの幸せを第一に考えている。

備考・・スレた一般人サスケに転生憑依。ナルトとヒナタが好きで二人が幸せなら他はどうでもいい。かなり修業したため、実力は暁のメンバークラス。忍術は火遁と雷遁を主に使う。体術はトップク

ラスで主に剣術を使いこなす。武器は刀で九尾の妖気チャクラをつかって作り上げた妖刀『魔夜(まや)』。居合い斬りや連続抜刀を得意。今は火影とダンゾウの暗部。

原作の始まり

闇が包む木の葉の森、その中に数人の忍が木の枝を飛び乗りながら駆けている。
額宛ては草隠れのマーク、彼等は草隠れの忍。
彼等の目的はわからない。
おそらくは里の旧家もしくは名家の子でも誘拐しにきたのだろう。
数人の忍は緊張しながら森を駆ける。

「「「「！！」」」」

その時、何かが飛来する音が聞こえた。
何事かと後ろを振り向くと後ろにいた二人の忍がいなくなっていた。
下を見ると頭にクナイが刺さっており、血が流れて死んでいた。
残った忍は慌てて警戒する。
すると、後ろから何かが木の枝に着地する音が聞こえる。
振り向くと一人の暗部が立っていた。
背丈から見ると大人だが、顔に付けた面は異様だった。

「鬼の面・・だと！？」

そう、この暗部の面は鬼の面だ。
普通は十二支の面をつけるのだが、草隠れの忍は何故と考える前にこの暗部の正体に気付いた。

「ま、まさか。貴様が最近木の葉を守る鬼の暗部か！」
一人の忍がそう言うと残りの忍達は警戒レベルをあげる。
「だが、相手はたった一人！こっちはまだ四人いるんだ！数ではこっちが勝ってるんだ！奴を殺るぞ！」
草の忍達はクナイを持ち身構える。
鬼の暗部の手には刀が持たれていた。
鬼の暗部が消えた。
草の忍達は周りを見渡す。
後ろに振り向くとそこに鬼の暗部がいた。
草の忍達は構えるが何かがずれた音が聞こえる。
真ん中にいた忍が右を向くと右にいた忍の首がずれ、顔が胴体から離れ落ち、切れた部分から血が噴出す。
忍達は驚愕した。
いつ斬ったのかわからなかった。
また鬼の暗部が消え、今後は左の忍の前に現れ胴体を真っ二つに切り裂く。
さらに隣にいた忍も袈裟斬りで斬り伏せる。
最後の一人は逃げようとするが、鬼の暗部の手裏剣が両腕と両足に刺さり動けなくされる。
懇願をする間もなく最後の一人は唐竹で斬られる。
鬼の暗部は刀を振るい血を拭い鞘に戻す。
そのまま、鬼の暗部は地面に降り夜空を見上げる。
その時、後ろから二人の忍が現れる。
この二人も暗部だ。
面は一人は狐、もう一人は狼。

「終わったか。」

「ああ・・・サスケ。」

鬼の面を外し、素顔を晒しだしす。
長い黒髪の青年、そう彼は変化したサスケ。

「暗部の時は黒鬼(こくき)だ。本名を言うなナルト。ヒナタも止めろよ。」

狐の面の暗部が面を外す。
金髪の青年に変化したナルト。
狼の面の暗部も面を外す。
長い黒髪で白目の美女に変化したヒナタ。
彼等は暗部として活動している。

「悪い悪い。それから俺は金狐(きんこ)だ。」

「私は銀姫(ぎんき)よサスケ君。」

「そっちが先に言ったのだろうが。まあいい、そっちも終わったのならこっちも終わらすか。・・・天照！」

サスケは万華鏡写輪眼『天照』で死体となった忍達を燃やす。
消し炭となったのを確認して、サスケ達は帰還する。

「それにしても明日だね。」

「明日？・・・ああ、アカデミー卒業試験か。」

「どうするのだろうな。もしかしたら合格しろとか言われるんじゃ

ねえだろうな。」
「言われるだろうな。一応旧家と名家の護衛だからな。旧家はともかく名家の子を守るのは嫌だがな。」
「俺も嫌だぞ。」
「私も。」
「まあ、ぐだぐだ言ってもしょうがない。帰還したら聞けばいいだけの話さ。俺はさっさと帰って寝たい。だからさっさと帰還するぞ。」
「ああ。」
「はい。」
サスケ達は闇の木の葉の中に溶け込んだ。

あれから六年がたった。
今日はアカデミー卒業試験。
教室にいるアカデミー生達は緊張した面持ちでイスに座って友達と話をしたりしている。
そこに後ろの扉が開く。
「ようおはよう。」

「おはようございます。」

「よう！渦風に波巻。今日も一緒に登校か。」

教室に入ってきたのはナルトとヒナタだ。
もちろん偽名でナルトは渦風ナル、ヒナタは波巻ヒナと名乗る。
実は火影から旧家と名家の護衛の任務を受けており、アカデミーに入学する事になった。
表で死んだ事になっているナルトとヒナタはさすがに無理だと思った。
しかし、火影の口から出た言葉はとんでもない事だった。
それは、二人に偽名を付けアカデミー生に成り済ませと言ってきたのだ。
さすがにナルトとヒナタは呆れ果てるが、任務なためと断る理由もなかったため承諾した。
ちなみに偽名の名字はナルトの父と母の名字を使っている。

「ナル。ヒナ。」

「サスケ。」

教室の窓際で最後尾の席にいるサスケがナルトとヒナタを呼ぶ。
ナルトとヒナタはサスケのいる席の隣に座る。
窓際からサスケナルトヒナタという順に座る。

「結局合格しなきゃならなくなったな。」

「全く嫌だぜ。合格はともかく、班決めであの二人と一緒になった日なんか俺任務降りるぞ。」

「私も。」

「もちろん俺もだ。そうならない事を祈ろうぜ。」

サスケ達は組みたくないというその二人をチラッと見る。
一人は、黒髪で鋭い目付きで近寄るなオーラを醸し出す少年うちはユラム。
名の通りうちは一族の者であの悲劇の生き残り。
うちは一族はサスケとイタチをのぞいて全滅したと思いきや何故かこの少年が生き残っていた。
何故生き残ったのかわからない。
ただ、それを皮切りにユラムはサスケに殺気を放ち、さらには殺そうとしてくるが、ナルト達がいたため断念する。
サスケ自身はあんまり興味がない。
むしろ無視している。
もう一人は日向ハナビ。
何故かハナビはアカデミーに通っていてしかもサスケ達と同じ学年扱い。
誰もが分かる通り日向家のコネで七歳でアカデミーに通う。
もちろん、姉であるヒナタの存在を知らない。
しかも、父ヒアシの血を日向の傲慢な血を引き継いでおり日向こそ最強だと自負して疑わない。
そのため、ハナビは他人を見下している。
こんな二人だが、一応は護衛目標であるため無下にはできない。

「まあ、そんな事はないだろう。俺達三人が別れる事はない。俺はそう信じている。」

「そうだな。」

三人はしばらく談笑を続ける。
その後、試験が開始し順番に名前が呼ばれていく。

「次、うちはサスケ！」

「はい。」

サスケは立ち上がり、試験する教室に移動する。
教師二人の前に立ち、チャクラをねり印を結ぶ。

「分身の術！」

煙が現れ、本体の周りに三人の分身体が現れる。

「うん。合格だ！」

額宛てをサスケに渡す。
サスケは礼をいいさっさと教室から出る。
その後、ナルトとヒナタも合格した。
放課後、サスケ達はアカデミーの正門前でどうするか考えていた。

「さて、どうする？俺はこのまま帰るが。」

「私は少し買い物をしてから帰るわ。そろそろ材料も少なくなってきたからね。」

「なら、俺も同行するぜ。」

「うん。よろしくね。」

「決まりだな。そんじゃあお先に。」

「うん。」

「じゃあな。」

サスケは家に帰り、ナルトとヒナタはこのまま買い物に出かけた。
ちなみにサスケ達の家は二つある。
一つは居住区の中にありかなり高価な家。
これは表での実家だ。
もう一つは離れた木の葉の森の中にある。
こちらは暗部としての家だ。
どちらも一軒家としてはかなりよくできている。
その森はほとんど人がこない森だ。
だから、住むにはうってつけだ。
今日のサスケは表のほうの家に帰る事にした。
数時間後ナルトとヒナタが帰ってきてご飯を食う。
そして夜、三人に任務が下された。

原作の始まり（後書き）

原作であった最初の話。
これにはちゃんと裏の話がある。
次回は影の戦い・・・

うずまきナルト（暗部名金狐―偽名渦風ナル）

ＣＶ竹内順子

容姿・・原作と同じ。頬の髭はない。服装は仮面ライダーカブトのやさぐれた影山の服装。

性格・・表、明るく人懐っこい。
　裏、残忍で冷酷。殺しは一瞬で殺るかジワジワいたぶり殺すかのどちらか。
　素、ヒナタが大好きでヒナタ第一主義。ヒナタに弱く、ヒナタの言う事は信じる。ヒナタを苛める者に容赦しない。

備考・・原作の主人公。サスケに助けられ、サスケとヒナタとイタチに出会う。ヒナタとは恋人同士でサスケとイタチは親友関係。ヒナタを心の底から愛している。サスケには恩を感じている。九尾を制御できる。両親とはすでにあっている。忍術は火遁と風遁を使い

こなす。実力はサスケと同クラス。武器はギザギザの刃がついた妖大刀『酷撃（こくげき）』。大刀にチャクラを込めるとギザギザの刃が動きチェーンソーのようになる。

影の戦い（前書き）

表の戦いがあれば裏の戦いがある。
光の戦いがあれば闇の戦いがある。
誰もが知らない戦いも存在する。

日向ヒナタ（暗部名銀姫―偽名波巻ヒナ）

ＣＶ水樹奈々

容姿・・原作と同じ。偽名時は黒のコンタクトをつける。服装は動きやすい白の服で白のロングジャケットコート。

性格・・表、少し内気だが優しい。
裏、冷静で敵には冷酷。ムダな事はしない。
素、ナルトの事を心の底から愛しておりナルト第一主義。ナルトの為ならどんな事もする。日向を見限っておりもうどうでもいい。しかし、心の奥底では恨みと憎しみがありいずれ自らの手で滅ぼしたいと思っている。

備考・・元日向家長女。最初は力がなかったがサスケとナルトに出会いともに修業したおかげでメキメキ強くなる。しかし日向の醜さと父親の自分の扱いをしり日向家を見限る。表では死んだ事になっている。実力はサスケとナルトと同等の強さ。忍術は水遁と風遁。

体術はトップクラスで柔拳最強の使い手。武器は妖鉈『白魅(しらみ)』、チャクラを流し込む事で先端から薄く鋭いチャクラの刃ができ流し込んだ分だけ伸びる。よく見ないと見切れない。

影の戦い

とある木の葉の森の中である中忍二人とアカデミー生一人が事件を起こしている。
そこからかなり離れた場所で約三十人の忍が森を駆けていた。
額宛ては霧隠れの忍。
霧隠れが木の葉に来た理由はこの先にいる裏切った教師の援護しにきたのだ。
三十人の忍が森を駆ける。

「あのミズキって奴遅いな。何をしてやがる。まさか、気付かれたのか？だとしたら厄介だぞ。我々の存在がばれる。ここは一つ様子を見に。」

「その必要は無い。」

その時、前方から声が聞こえた。
全員が止まり前方を見る。
前方の闇から三人の暗部がいる。
三人の暗部・・・そうサスケ達である。
サスケ達はダンゾウからミズキが霧隠れと繋がっているという情報を知りその霧隠れを始末しろっと任務を授かった。
サスケ達は任務を受け三十人の霧隠れの忍と対峙する。

「鬼と狐と狼の面。まさか、貴様らがあの暗部か。噂は聞いてるぞ。」

霧隠れの忍の一人がそう言いながら全員に警戒するよう指示をだす。

「・・・何も言わないか。貴様らを殺せば里の戦力は下がるというわけだな。」

「言いたい事は終わったか。そろそろ殺らしてもらう。」

サスケ達は武器を出し構える。

「散開！！」

霧隠れの忍十人づつが別に跳ぶ。
サスケ達も同じように別れて跳ぶ。
十人の忍の前にサスケが立ちはだかる。
サスケは刀を構え、瞬身の術で懐に現れ一気に三人を切り裂く。
次に連続の斬撃で四人を八つ裂きにする。
残り三人になり、霧隠れの忍は慌てはじめる。
間髪を入れずサスケは一人の心臓に刀を突き刺す。
刺された忍は口から血を吐き出す。
抜いて逆袈裟で斬る。
あと二人となり、二人は距離を取り手裏剣やクナイを投擲する。
しかし、サスケはそれをほとんど躱し、時には刀で防ぐ。
そのまま走り、左の忍を右切り上げで殺す。

「クソッ！水遁・・ぐああっ！！」

最後の一人が術を使おうとするが、両手の甲に手裏剣が刺さってい

た。
苦痛で顔を歪めてる間にサスケは懐に入り斬撃を三回し、絶命させる。
サスケは刀を振るい鞘に納める。
死体を消し、サスケは木の枝に上がり夜空を見上げる。

サスケが敵と交戦しているのと同時期、ナルトは太刀を構え、挑発する。

「オラ！こいよ！ビビってるのか！？」

「貴様〜！！」

十人の内二人が頭に血が上りナルトに向かって突っ込んでくる。

「遅えよ！」

ナルトは太刀を振るい二人まとめてバッサリ切り裂く。
それを見た残りの忍は挑発に乗らないよう警戒を強める。

「こないのかよ。だったらこっちから行って殺るよ！」

ナルトが瞬身の術で近付き一人を縦に真っ二つにする。
そのまま豪快に振るいまた一人、また一人と殺していく。
六人目を斬ろうと袈裟斬りで肩を斬ろうすると、途中で止まる。

「あん？チッ！てめえ、チャクラで俺の太刀を！」

「ククッ！これならてめえの背後は隙だらけだ！」

背後にいた二人の内一人がそう言うと二人はナルトの背後を攻撃しようとクナイを持って近付く。
だが、ナルトはニヤリと笑う。

「あめえよ！バカが！！」

ナルトは太刀にチャクラを流す。
すると太刀の刃がチェーンソーのように回転し動く。
ギャリギャリギャリと音が森に響き止まっていた太刀が動き敵の中身が削られ血が噴き出しながら裂かれていく。
裂かれた忍は声にもならない悲鳴をあげながら絶命し、太刀はそのまま右の忍の脇腹に刺さる。

「ぐぎりゅあああぁぁあああぁぁぁ！！」

右の忍は悲鳴をあげる。
それはそうだ。
ナルトの太刀はまだ回転しているのだ。
そのまま刃が当たり削られながら斬られているのだからその痛みは尋常じゃない。
血がどんどん噴き出され肉が飛び散る。
それをみた最後の一人は恐怖に染まる。
なんとか逃げようとするが、両足にクナイや手裏剣が刺さり前のめりに倒れる。
顔だけを後ろに振り向けるといつの間にか中身が飛び散らせて死んだ忍を放置しながらこっちに体を向けているナルトがいた。

最後の忍は恐怖に染まり怯える。
ナルトはゆっくり近付き、敵の目の前に立ち、太刀を敵の背中に突き刺す。
そこからナルトの解体ショーが始まった。
削られる音と敵の悲鳴だけが森の中で響いた。

ナルトが敵の解体ショーをしている頃、ヒナタも残り二人となった敵と対峙していた。
ヒナタの右手には鉈が握られている。

「ハァッ、ハァッ、ハァッ、クソッ！どうなってやがるんだ！」

「何故なんだ！何故離れた所から鉈を振ってるだけなのに仲間が殺られるんだ！？」

敵二人はわからないといった表情でヒナタを睨み付ける。

「こないのですか？なら、またいきます。」

ヒナタはその場でまた鉈を唐竹のように振るう。
すると、右の敵が縦に斬られ血飛沫が舞う。
そのまま倒れ絶命した。
最後の一人が鉈をジッと見つめる。
すると、うっすらだが、鉈の先に伸びているものを見つけた。

「こ、これは？！！そ、そうか！アレはチャクラ！そうか！チャク

ラで伸していたのか！」

「へぇ、気付きましたか。」

そう、ヒナタの鉈の先にはチャクラの刃ができている。
チャクラ刀の一種で鉈にチャクラを流し込み薄く鋭いチャクラの刃ができる。
かなり薄くよく見ないと見えない。
さらに威力も高い。

「ふっ、ならばそれさえ気をつければ貴様ごときどうという事はない！」

「・・・」

ヒナタは敵の言葉に乗る事もなく鉈を構える。
ヒナタは鉈を横に振るう。
敵はそれをしゃがんで躱す。
躱した直後、敵はヒナタの懐に飛び込もうとする。

「もらっ・・グフッ！！」

しかし、その前にヒナタが先に懐に入り左の柔拳を叩き込んだ。
敵はその場でうずくまり動くなくなる。
ヒナタは正面に立ち鉈を振り上げる。
そのまま鉈を振り下ろし頭からかち割る。
顔面は潰れ胸元までパックリと中身が見え開いている。
ヒナタはそのまま死体を燃やし、ナルトとサスケと合流する。

サスケ達は合流し、死体を焼却する。
合流後、サスケ達はダンゾウに報告に帰還する。
「終わったし報告して帰るか。分身体を消して結界を消さないとな。」
「あっちはいいの？」
「俺達の管轄外だ。どうでもいい。それより数日後に班わけがあるから俺達が一緒になれるよう直訴しに行こうぜ！」
「そうだな。」
サスケ達は結界を消して、帰還する。
その日、おちこぼれのアカデミー生が教師の額宛てをもらい試験卒業をもらった。

影の戦い（後書き）

班わけ・・・忍の運命を決める。
誰と組むのか、それは誰もわからない。
次回、班わけ・・・

うちはユラム

ＣＶ杉山紀彰

容姿・・原作のサスケと同じ容姿同じ服装をしている。

性格・・原作のサスケと同じだが若干短気で自信過剰。

備考・・原作のサスケポジションのオリキャラ。六年前のうちは一族の滅亡の時、イタチに殺す価値無しと言われ助かる。（怯えて逃げまくり命乞いをしたためイタチに呆れられたおかげ）その後、憎しみと復讐のためイタチとサスケを殺すと決める。サスケを狙うがナルト達がいたため断念する。うちはこそ最強だと信じて疑わない。自意識過剰でプライドが高い。実力は原作のサスケより少し低い。忍術は火遁。

班わけ（前書き）

誰と組む？
それはバランスよく、そして決まっている。

遠野トモル

ＣＶ優希比呂

容姿・・黒髪で黒目。背はナルトより少し高い。服装は原作ナルトの服で色違い。色は灰色。

性格・・原作のナルトと同じ。語尾に「～ァ」や「～ォ」と伸した言い方をする。

備考・・原作のナルトポジションキャラ。九尾がないかわりにチャクラの量がかなり多い（中忍の上クラス）。アカデミーの成績はドベで皆からおちこぼれと呼ばれている。サクラが大好き。実力は下忍の下。使える忍術は影分身と基本忍術のみ。

班わけ

数日がたち、サスケ達と合格した者達はアカデミーの一つの教室に集まっていた。
そこにドアが開き一人の少年が入ってくる。

「おいおい、おちこぼれがなんでここにいるんだよ。」

「おちこぼれく～ん。今日は授業はないぞ～。」

「うるせえェ！この額宛てが見えないのかァ！今日から俺も下忍だァ！」

少年の名は遠野トモル。
アカデミーきってのおちこぼれで数日前の事件に関与していてそのおかげで額宛てをもらったのだ。
サスケ達は関与しなずいつもの端の席で談笑する。

十分後、教師海野イルカが教室に入る。

「全員、席に座れよ！・・・さて、今日から君達はめでたく一人前の忍者になったわけだが・・・しかし、まだまだ新米の下忍。本当に大変なのはこれからだ！」

イルカが新米の下忍達にこれから今後三人一組になり各班に一人ずつ上忍の先生が付き、指導の元任務をこなしていくと言う。
しかも、班はバランスよくするためあっちで決めたようだ。
それを知り新米の下忍達は声を荒げ文句を言う。
サスケ達は新米の下忍達を小バカにしたような表情で見つめる。
班の発表が言い渡される。

「・・・次、第七班。春野サクラ、遠野トモル、それとうちはユラム。」

第七班のメンバーが発表された。
自分の名が出た瞬間トモルは喜びサクラは沈むが、ユラムの名が出たら逆にサクラは喜びトモルは沈む。
もちろんトモルは怒るが、ユラムは一番の成績トモルはドベと言われる。

「次の班を言うぞ。」

第八班は日向ハナビ、犬塚キバ、油女シノとなる。
第十班は原作とかわりない。

「最後、第十一班。うちはサスケ、波巻ヒナ、渦風ナル。」

班わけの発表が終了し、午後から上忍の先生が来るからそれまで解散するようイルカはそう言う。
サスケ達は屋上で昼飯を食い、午後までのんびりする。

午後になり、サスケ達は教室に戻り上忍の先生が来るのを待つ。
数分後、一人の上忍が教室に入ってきた。

「第十一班。俺が担当上忍だ。俺について来い。」

担当上忍に呼ばれサスケ達は教室を出る。
アカデミーから少し離れた建物の屋上に集まる。

「自己紹介をする必要は無いな。三人の名前は知っている。」

「アンタが俺達の担当上忍か。アンタ・・暗部だな。しかもダンゾウの部下だろ。」

「そうだ。俺の名はラウリ。」

このラウリはダンゾウの部下で数日前にサスケ達は一緒の班になれるよう火影に直訴しに行き、担当上忍を誰にするが困った所ダンゾウが自身の部下から一人をサスケ達の担当上忍にすると言ってきた。火影は許可をし、結果ラウリが担当上忍になった。

「さて、本来ならテストをするのだがお前達の実力は知ってるからやる必要は無いな。だから合格にする。」

「いいのか？」

「構わんさ。俺の実力ではお前達に勝てん。だからムダな事はやらん。」

あっさりサスケ達は下忍となった。

これから表のサスケ達が動く。
なお二日後、第七班と第八班と第十班が晴れて下忍になったようだ。

班わけ（後書き）

下忍になり任務をする。
それはあまりにつまらない。
それから数ヶ月。
次回、中忍試験・・・

ラウリ

ＣＶ緑川光

性格・・冷静で達観している。

備考・・オリジナルキャラ。ダンゾウの部下の一人でサスケ達第十一班の担当上忍。根で育てられており高い実力を持つ。ダンゾウの部下だがサスケ達を尊敬しており、賛同している（実は、サスケ達は暗部内ではファンクラブがいるほど人気があり信奉者がいるほど有名）。視野が広く味方だろうが敵だろうが正しい評価をくだす。実力は暗部としてはトップクラス。忍術は土遁と雷遁。

中忍選抜試験（前書き）

下忍になり数ヶ月、ついに始まる中忍になるための試験。

日向ハナビ

ＣＶ浅井清己

容姿・・原作と同じ。服装は袖が長い白の服と膝までのズボン。

性格・・傲慢で他人を見下す。冷静だが辛口で辛辣。

備考・・原作では日向家次女だがここでは日向家次期当主。日向家や父の教えにより日向家が最強だと信じて疑わない。そのため他人と自分は違い選ばれた忍だと思い込んでいる。実力は七歳ながら下忍の中。柔拳が得意。

中忍選抜試験

正式に下忍になって早数ヶ月がたった。
下忍になったサスケ達は下忍が受けるランクの任務をこなしつつ暗部の任務もこなしてきた。
表の任務はサスケ達にとっては暇でしかなかった。
ちょうど八つ目の任務を終え、暗部任務に赴こうとした時、三人はラウリに呼ばれた。

「お前達、実は今度中忍選抜試験をするんだが選抜する事にした。」

ナルトとヒナタは、は？っとした表情でラウリを見る。
サスケは、もうそんな時期かと思い出した。
原作知識が薄れていってるため重要な部分しか覚えていなかった。

「そうか。・・・で、それが目的ではないのだろ？」

「さすがはサスケ。鋭いな・・・ここからが本当の話だ。その中忍試験に砂と音が木の葉を襲撃するらしい。」

木の葉を襲撃・・・それを聞いたサスケ達は、そうかっといった表情でみる。

「音って確か最近できた小さな里だったよな。そんなとこがなんで

砂と手を組めるんだ？」

「その音の創設者はあの大蛇丸だ。」

大蛇丸・・・木の葉の伝説の三忍の一人にして抜け忍。
実力はトップクラスで上忍や暗部クラスでは歯がたたない。

「大蛇丸・・あの大蛇丸か？」

「そうだ。」

「・・なるほどな。」

「あの大蛇丸の事だ。それだけじゃないだろうな。」

「・・・つまり、俺達の任務は旧家の護衛か。」
「そうだ。おそらく新人全員参加するだろうな。」

サスケ達は断りたい気持ちだったが護衛任務があるため、断る事ができない。

「・・・ふぅ、わかった。中忍選抜試験に参加してやる。」

「志願書は明日渡す。解散！」

次の日、志願書をもらう。

そして中忍選抜試験当日、サスケ達は試験会場である学校に行く。
二階で何か揉め事があったが無視してさっさと会場のほうに行く。
入ると沢山の下忍がいた。
それを見たサスケ達は。
（多！）
（うざっ！）
（こんなにいるんだ。少ないと思ってた）

かなりうざそうに見つめる。
その時、入り口の扉が開き誰かが入ってきた。
入ってきたのは第七班だった。
サスケ達は近くの壁に寄る。

「ユラムく～ん！」

第七班のところに第十班さらに第八班が集まる。

「これで護衛対象は揃ったな。」

サスケは小さな声で言う。
三班達はふざけあいながら談笑する。

「おい君達！もう少し静かにした方がいいな・・・」

すると、誰かがサスケ達に声をかけてきた。

「君達がアカデミー出たてホヤホヤの新人１２人だろ。かわいい顔してキャッキャッて騒いで・・・まったく。ここは遠足じゃないんだよ。」

「誰よ〜〜アンタ？エラそーに！」

声をかけてきたのは眼鏡をかけた木の葉の忍だ。

「ボクはカブト。それより辺り、特に後ろを見てみな。」

「辺り？」

『『『？』』』

サスケ達三人以外が後ろを向くと雨隠れの額宛てをした下忍達がサスケ達を睨み付ける。

「君の後ろ・・・あいつらは雨隠れの奴等だ。気が短い。試験前でみんなピリピリしてる。どつかれる前に注意しとこうと思ってね。」

第七班と第八班と第十班は後ろの雨隠れの睨みに驚く。

だが、サスケ達はカブトを見る。

「どう見る、こいつ。」

「うまく隠してるようだけど、ただの下忍じゃないな。」

「何者かしら？」

サスケ達はカブトがただ者じゃないと気付く。

「ま！仕方ないか。右も左も分からない新人さん達だしな。昔の自分を思い出すよ。」

「カブトさん・・・でしたっけ。じゃあ、あなたは二回目なんですか？」

「いや、七回目。この試験は年に二回しか行われないからもう四年目だ。」

「それだけの実力なら合格してもいいはずなのにな。」

「どっかのスパイってところですか。」

ナルトとヒナタが小声で話す。

「じゃあ、かわいい後輩にちょっとだけ情報をあげようかな。この忍識札でね。」

「忍識札？」

「簡単に言えば情報をチャクラで記号化して焼きつけてある札のことだ。」

カブトのその言葉を聞き、サスケ達三人はますます目を細める。

「確定だな。完全に何処かの里のスパイだな。」

「けど、何処の里？」

「・・・音だな。そこしか考えられないな。」

サスケ達はカブトが音のスパイだと確定した。

「そなカードに個人情報が詳しく入ってるやつ・・・あるのか？」

「フフ・・気になる奴でもいるのかな。もちろん今回の受験者の情報は完璧とまではいかないが焼きつけて保存している。君達のも含めてね。情報はあるかい？検索してあげよう。」

「砂隠れの我愛羅・・それに木の葉のロック・リーって奴だ。」

「なんだ。名前までわかってるのか。それなら早い。」

ユラムが二人の名を言うとカブトは忍識札から二枚引く。

「見せてくれ。」

ロック・リーと我愛羅の情報がカブトから聞き、忍識札に載っている物を見る。

「木の葉・砂・雨・草・滝・音・・・今年もそれぞれの隠れ里の優秀な下忍がたくさん受験に来ている。ま、音隠れの里にいたっては近年誕生した小国の里なので情報はあまりないが、それ以外は凄腕ばかりの隠れ里だ。」

「つ、つまり・・ここに集まった受験者はみんな・・・」

「そう！リーや我愛羅のような、各国から選りすぐられた下忍のトップエリート達なんだ。そんなに甘いもんじゃないですよ。」

それを聞き新人達は強張った表情になる。

しかし、サスケ達はそうでもなかった。

別にどうでもよかったし、たとえ下忍のトップエリート達だとして

も相手にならないので興味もなかった。
その時、トモルが下忍達にふかした。
それを聞き、全下忍がトモルとサスケ達を睨みつけた。
トモルはサクラに叱られる。
その時、下忍の人込みから三つの影が動く。
カブト他実力のある下忍はすぐに気付く。
一つの影がジャンプしカブトに向けてクナイを投げる。
カブトは気付き、後方に下がって躱す。
そこにもう一つの影が下から現れカブトの前に出る。

（こいつら音隠れの・・・）

影の正体は音隠れの忍だ。
音隠れの忍は右の攻撃を仕掛けるがカブトは紙一重で避ける。
その瞬間カブトの眼鏡が割れた。
さらに。

「うええっ！」

カブトはその場で嘔吐した。
カブトの前に三人の音隠れの忍が立ち見下ろす。
一人目は顔に包帯を巻き、二人目はつんつん髪の黒髪、三人目は少女で髪が黒でストレートのロング。

「カブトの兄ちゃんん！」

「大丈夫！？」

「・・・ああ・・大丈夫さ・・・・・」

「なーんだ。大したことないんだぁ。四年も受験してるベテランのくせに。」

「アンタのカードに書いときな。音隠れ三名、中忍確実ってな。」

音隠れ三人を見、特に包帯を巻いた少年を注目し何かネタがあるのか警戒をする。

「くだらん。カブトも何故わざと食らう。」

「自意識過剰すぎ。バカとしか言いようがないな。」

「技を出す前に殺ればいいだけ。所詮下忍のトップエリートだとしてもこの程度ね。」

サスケ達は音隠れと下忍のトップエリート達を完全にどうでもいいと感じで見つめる。

「静かにしやがれ！どぐされヤローどもが！！」

その時、黒板のほうから怒声が響き煙が出る。

ついに中忍試験が始まった。

中忍選抜試験（後書き）

試験が始まった。
最初の試験は・・・ペーパーテスト。
次回、第一試験・・・

第一試験開始（前書き）

最初の試験。
それは言葉のままではない。
ちゃんと裏がある。

第一試験開始

黒板の前に現れたのは、多数の中忍と特別上忍森乃イビキだ。
拷問と尋問のスペシャリストだ。

「待たせたな・・・中忍選抜試験第一の試験、試験官の森乃イビキだ。」

イビキの外見に多数の下忍がビビる。

「音隠れのお前ら！試験前に好き勝手やってんじゃねーぞ、コラ。いきなり失格にされてーのか。」

「すみませんねぇ・・・なんせ初めての受験で舞い上がってまして・・つい。」

「フン・・・いい機会だ言っておく。試験官の許可なく対戦や争いはありえない。また、許可が出たとしても相手を死に至らしめるような行為は許されん。オレ様に逆らうようなブタ共は即失格だ。分かったな！」

イビキは下忍全員に睨み付ける。
ほとんどの下忍が畏縮する。
後ろにいる中忍達がニヤニヤと薄ら笑いする。

「では、これから中忍選抜第一の試験を始める。志願書を順に提出して代わりにこの・・・座席番号の札を受け取りその指定通りの席に着け！その後、筆記試験を用紙を配る・・・」

「？・・？・・・・ペッ・・ペーパーテストォオォォォオ！！」

イビキの言葉にトモルは絶叫する。
下忍達は志願書を渡し、席に座る。
サスケは最後尾の真ん中の席、ナルトは最後尾から三つ目で真ん中の席、ヒナタはナルトの右隣りの席に座る。

「試験用紙はまだ裏のままだぁ。そして、オレの言うことをよく聞くんだ。」

イビキがルール説明を始める。

「この第一の試験には大切なルールってもんがいくつかある。黒板に書いて説明してやるが、質問は一切受け付けんからそのつもりでよーく聞いとけ。」

「ルール？」
（質問を受け付けないって）

「第一のルールだ！まず、お前らには最初から各自１０点ずつ持ち点が与えられている。筆記試験問題は全部で１０問各１点。そして、この試験は減点式となってる。つまり、問題を１０問正解すれば持ち点は１０点そのまま。しかし、問題で３問間違えれば持ち点の１０点から・・３点引かれ７点という持ち点になるわけだ。」

つまり、一つ間違えると一つ減るという事だ。
全部間違えると0点になる。

「第二のルール・・この筆記試験はチーム戦。つまり、受験申し込みを受け付けた三人一組の合計点数で合否を判断する。つまり、合計持ち点30点をどれだけ減らさずに試験を終われるかをチーム単位で競ってもらう。」

ある人物のデコが机にぶつける。
デコが広い護衛対象外サクラだ。

「ちょ・・ちょっと待って！持ち点減点式の意味ってのも分かんないけどチームの合計点ってどーいうことぉ！！」

「うるせぇ！お前らに質問する権利はないんだよ！これにはちゃんと理由(わけ)がある。黙って聞いてろ！分かったら肝心の次のルールだ。」

サスケ達はサクラをやっぱりどうしようもないカスだと思った。

「第三に試験途中で妙な行為・・つまり、カンニング及びそれに準ずる行為を行ったとここにいる監視員たちに見なされた者は・・・その行為一回につき持ち点から2点ずつ減点させてもらう。」

その言葉にほとんどは気付いた。

「そうだ！つまり、この試験中に持ち点をすっかり吐き出して退場してもらう者も出るだろう。」

筆記問題以外にも減点の対象を作ってあるのだ。
監視員である中忍たちはいつでもチェックしてるといった目付きで

睨む。

「無様なカンニングなど行った者は自滅していくと心得てもらおう。仮にも中忍を目指す者、忍なら・・・立派な忍らしくすることだ。」

それだけでサスケ達は気付いた。
サスケは原作にこんなのあったなと思い出した。

「そして最後のルール・・・この試験終了時までに持ち点を全て失った者、および正解数0だった者の所属する班は・・・三名全て、道連れ不合格とする!!」

その瞬間みんな驚愕した。
つまり、誰かが持ち点を失ったらその時点で三名一組は失格になる。
そのプレッシャーは計り知れない。

「試験時間は一時間だ。よし・・・始めろ!!」

第一試験が始まった。
みんな用紙を表にし、問題を読み答えを書いていく。

サスケは始まった瞬間すぐに写輪眼を使う。

(思い出した。確かこれはカンニング公認の情報収集戦だったな。
さて、ターゲットを見つけるか)

サスケが言ってしまったが、そうこれは偽装や隠蔽術を使って相手の情報を手にいれられるかの試験なのだ。
先の言葉を思い出してみよう。
カンニングを無様なやり方をするなと言った・・裏の読み方をすれば忍らしくばれないようにカンニングしろと言ったのだ。
さらに減点式もよく考えてみよう。
カンニングが発覚し一回につき2点引かれる・・・つまり四回はカンニングチャンスあるのだ。
ここまで言えば分かる人はいるだろう。
要するに、ここで試されるのはいかに監視員とカンニングをされる者に気取られずに正確な答えを集められることができるのかという事だ。
サスケは原作を思い出しさらにイビキの言葉を反芻してすぐに理解し行動する。

（ターゲット発見。さて、答えを書いていくか）

同じ頃、ナルトとヒナタもカンニングを始めていた。
ヒナタが白眼で答えを見、チャクラを使って相手と心で会話する術、心念の術を使ってナルトに答えを教えながら書いていく。

（このままいけば楽勝だな）

（そうね。それより最後の、１０問目の問題どう思う？）

１０問目の問題は開始から４５分後に問題が出るらしい。

（気になるな。特にここ、“担当教師の質問を良く、理解した上で回答して下さい。”ってどういう事だ？）

（もしかしたら、これが物凄く重要になるかもしれないかも）

（・・・有り得るな。とにかく今は目の前の問題の答えを書いていくぜ）

（うん）

ナルトとヒナタは問題を答えていく。

十五分くらいすぎた頃、ほとんどの下忍がこの試験の意味を理解し行動を開始した。
偽装や隠蔽術を使い解答を見つけていく。
時々監視員にバレ五回ミスり、失格になる者も増えてきた。
それにしても、この第一試験はよくできている。
まず誰もがみんな用紙の問題を見る。
しかし、問題が難しすぎてわからない。
もっともこんな問題は実戦では役に立たない。
ただし、それを自力で解くバカもいるが。
そして、誰もがカンニングするしかないと考える。
しかし、監視員がいるためカンニングなんかできない。
そこで試験官の言葉を反芻する。
そして、裏の意味・・この試験の意味を理解する。
いまだに理解できないマヌケもいるが。
よくできてる試験だ。
この試験の意味を理解できるようちゃんと道筋ができている。
情報収集戦はいかに相手の裏の意味を読み取り可能な限り、また見

つからないよう情報を手にいれられるかである。
潜入任務などにはこの力は必要なのだ。
そのため忍にとっては無くてはならない技術の一つだ。

そして、４５分が経った。

「よし！これから第１０問目を出題する。」

第一試験開始（後書き）

最後の問題。
それは絶望的なルール。
次回、第一試験突破・・・

第一試験突破（前書き）

第１０問目・・・あまりにも絶望的なルールが襲う。
主にサスケ達以外の下忍に。

第一試験突破

「よし！これから第１０問目を出題する！！」

４５分が経ち、１０問目が出題される。

「・・・と、その前に一つ。最終問題についてのちょっとしたルールの追加をさせてもらう。」

突然のルール追加、誰もが緊張して聞こうとする。

その時、扉からトイレに行っていたカンクロウが戻ってきた。

監視員と一緒に。

「フ・・・強運だな。お人形遊びがムダにならずにすんだなァ？」

（コイツ・・カラスを見破ってやがる）

（あからさますぎなんだよ）

イビキだけでなくサスケ達も気付いていた。

「まあいい、座れ。」

カンクロウは座る前にこっそりテマリに解答を書いてある紙を渡す。

「では説明しよう。これは・・絶望的なルールだ。」

絶望的なルール・・・それはいったいなんなのか？

「まず・・お前らにはこの第１０問目の試験を“受ける”か“受けない”かのどちらかを選んでもらう。」

「え・・選ぶって・・・！もし第１０問目の問題を受けなかったらどうなるの！？」

「受けないを選べば、その時点でその者の持ち点は０となる。つまり失格！もちろん同班の二名も道連れ失格だ。」

そこまで聞いて下忍の誰もが文句を言い、叫ぶ。

「・・・そして、もう一つのルール。」

（まだあるの！？いい加減にしてよ！！）

「受けるを選び、正解できなかった場合・・・その者については今後永久に中忍試験の受験資格を剥奪する！！」

永久に受験資格を剥奪・・・その言葉に誰もが吠え叫び慌てる。

黙ってた下忍も叫んでいた下忍も驚愕し、いきなりのルールに愕然とする。

「そ、そんなバカなルールがあるかぁ！！現にここには中忍試験を何度か受験している奴だっているはずだ！！」

「ククッ・・ククククッ！」
イビキが笑う。
「運が悪いんだよ。お前らは、今年はこのオレがルールだ。その代わり引き返す道も与えてるじゃねーか。」
『『『え？』』』
「自信のない奴は大人しく受けないを選んで・・・来年も再来年も受験したらいい。」
なんて甘い言葉いや、毒なんだろう。
受けるを選び間違えれば中忍試験の受験資格は永久に剥奪されずっと下忍のまま、逆に受けないを選べば失格だが中忍になれるチャンスはある。
どっちに転んでも分が悪い。
並の神経では選べない。
「では始めよう。この１０問目・・・受けない者は手を挙げろ。番号確認後、ここから出てもらう。」
静寂が包み込む。
誰も手を挙げない。
受けるか受けないか・・・どっちに転んでも分が悪い、それがグルグル頭の中で回ってるのだ。
約数分が経過した。
「お、俺は・・・止める！受けない！」

一人が手を挙げ受けないを選ぶ。
それからどんどん下忍が一人一人手を挙げていく。
失格者が増える。

（それにしてもアホだろ。受験資格永久剥奪って試験官ができるわけないだろ）

（これは脅しだな。こんなんで迷うようじゃたかがしれてる）

（だいたいなんで中忍になりたいのよ。そんなの階級という名の飾り。それに気付かないようじゃね）

サスケ達は別に中忍には興味がない。
それに試験官の考えも読めたので早く終わらないかといった感じで待つ。

「なめんじゃねぇーー！！！オレは逃げねーぞぉ！！」

トモルが机を叩き吠える。

「受けてやるぅ！！もし一生下忍になったって、意地でも火影になってやるから別にいいぃ！！！怖くなんかねーぞぉ！！」

その言葉に誰もがびっくりした。
特に同期の下忍と同じ班の二人は自分達の事を考えないトモルに呆れ果てる。

「もう一度訊く。人生を賭けた選択だ。やめるなら今だぞ。」

「まっすぐ自分の言葉は曲げねえ・・オレの、忍道だぁ！！」

トモルの忍道に、サスケ達をのぞいた下忍達の不安は一斉にふきとんだ。

（フン、面白いガキだ。こいつらの不安をあっという間に蹴散らしやがった。・・・７８名か、予想以上に残ったか。これ以上粘っても、同じだな）

イビキが監視員達を見回す。
監視員達も同じ気持ちのようだ。

「いい決意だ。では・・・ここに残った全員に・・・」

残った下忍達は唾を飲み込む。
サスケ達は見守る。

「第一試験、合格を申し渡す！！！」

合格・・・その言葉に残った下忍達はぽーぜん、驚愕、あっけ、そんな表情が取り巻く。

「ちょ、ちょっとどういうことですか！？いきなり合格なんて！１０問目の問題は！？」

「そんなものは初めから無いよ。言ってみればさっきの二択が１０問目だな。」

イビキがニカッと笑う。
コワもての顔が笑う・・・シュールだ。
誰もが前の９問は無駄だと思った。

約一名が声に出して言う。

「無駄じゃないぞ。９問目までの問題はもうすでに、その目的を遂げたいたんだからな。」

『『『？』』』

「君達個人個人の情報収集能力を試すという、目的をな！」

『『『『情報収集能力？』』』』

イビキがテストの本当の意味を教える。

誰もが気付いてたのに、真面目に回答したバカと最後まで気付けなかったマヌケは気付かなかった。

「しかしだ。ただ愚かなカンニングをした者は当然、失格だ。なぜなら、情報とはその時々において命よりも重い価値を発し、任務や戦場では常に命がけで奪い合われるものだからだ。」

イビキは額宛てを外し頭を見せる。

そこには火傷やネジ穴に切り傷、拷問の跡がくっきりと残っていた。

それをみた大半の下忍はその痛々しい頭に冷や汗を浮かべる。

イビキはすぐに額宛てをつける。

（さすがは拷問と尋問のスペシャリスト。自らもそれを体験してるからこその重みだな）

（俺達は基本暗殺だからな。あんまり重要視してないもんな）

（罠であれなんであれ、敵が目の前に現れたら殺る。それだけだも

んね）

「でも、なんか最後の問題だけは納得いかないんだけど。」

最後の問題・・・それは、中忍にとってもっとも重要なファクターなのだ。

「しかし、この１０問目こそが・・この第一の試験の本題だったんだよ。」

『『『『？』』』』

「いったい、どういうことですか？」

「説明しよう。この１０問目は受けるか受けないかの選択。言うまでもなく、苦痛を強いられる二択だ。受けない者は班員共々即失格。受けるを選び問題を答えられなかった者は永遠に受験資格を奪われる。実に不誠実極まりない問題だ。」

これだけでは、分からない。

イビキは分かりやすい例を言う。

敵や情報その他諸々不明、何もわからない危険な任務。

命が惜しい、仲間が危険にさらされるから危険な任務を避けて通れるか？

その答えはノーだ。

たとえどんなに危険な任務でも、おりることのできない任務もあるのだ。

中忍という部隊長とは、部下を鼓舞し、勇気を出し任務に挑む。

それが、必要な資質だ。

「いざという時自らの運命を賭せない者。来年があるさと不確定な未来と引き換えに心を揺るがせ、チャンスを諦めて行く者。そんな密度の薄い決意しか持たない愚図に、中忍になる資格などない！！とオレは考える。」

（サスケは隊長向きだな）

（そうね。私達を引っ張ってくれるもの）

（俺はそういうの嫌いなんだが。俺が引っ張っていくのはナルトとヒナタだけだ）

「入口は突破した。中忍選抜第一の試験は終了だ。君達の健闘を祈る。」

「おっしゃぁーー！！いのっててぇーー！！」

トモルが叫ぶ。
相変わらずうるさい奴だ。
その時、サスケ達とイビキは窓から何かが近付いてくるのに気付く。

「「「「！！」」」」

その時、なにかが窓ガラスを割りながら入ってきた。
誰もが警戒し、緊張する。
そこに現れたのは、一人の女性だった。

「アンタ達、よろこんでる場合じゃないわよ！！！私は第二試験官みたらしアンコ！！次行くわよ次ィ！！！ついてらっしゃい！！！」

次は第二試験。
今度はいったいどんな試験内容か。

第一試験突破（後書き）

次は第二試験。
内容は・・・
次回、第二試験説明・・・

第二の試験（前書き）

第二試験・・・それは命がけの試験。
だが、そこに思わぬ人物が。

第二の試験

第二試験の試験官アンコはとある森に第一試験に合格した下忍達を連れてくる。
そこは鬱蒼と茂った森が多くなんとも不気味の悪い。

「ここが第二の試験会場第四四演習場、別名・・・死の森よ！！！」

ほとんどの下忍がこの不気味な森に尻込みをする。

「フフ・・・ここが死の森と呼ばれる所以。すぐ、実感することになるわ。」

「死の森と呼ばれる所以。すぐ、実感することになるわ。なーーんておどしても、ぜんっぜんへーきぃ！怖くなんかないぞぉ！」

「死の森か。ここにきたのいつ以来だ？」

「確か・・三、四年前だったかな。あの時は大変だったね。」

「俺達は余裕だな。何するか分からないけど、ここもすんなり合格できそうだな。」

「中忍には興味ないがな。」

トモルは試験官に挑発し、サスケ達三人にいたっては、懐かしむ余裕がある。

「そう。君は元気がいいね。」

アンコは笑う。
だが、なんとも含みのある笑みだ。
次の瞬間、アンコの右手にクナイが持たれそれをトモルの頬に掠めるように投げる。
クナイはそのまま笠をした下忍の横を通り、地面に刺さる。
ほとんどの下忍がアンコのいきなりの行動に動けなくなり、アンコはいつの間にかトモルの背後に立つ。

「アンタみたいな子が真っ先に死ぬのよねェ。フフフ・・・私の大好きな赤い血、ぶちまいてね（ハート）」

「さすがはあの大蛇丸の元部下・・・変態だな。」

「大蛇丸も変態だったな。確かホモだったっけ。」

「ナルト君の前に現れたら、私が殺ります。」

「俺は？」

「サスケ君は一人で殺れるでしょ。」

なんとも頼りがいのある言葉か。
ナルトはヒナタの言葉に感涙している。
さすがは両想い・・

アンコは背後にいる何かに気付き、左手にクナイを構える。
「クナイ・・・お返ししますわ・・・」
「わざわざありがと。」
アンコの背後に立っていたのは笠をさした髪の長い草隠れの下忍だった。
サスケはその下忍を見て、目を細める。
「サスケ?」
「大蛇丸だ。」
「!・・・どこに?」
「あの笠をさした草隠れの下忍だ。髪の長い。」
「!・・・あいつが。でも、なんでわかったんだ?」
「資料にのっていた。あの長い舌、それにこのチャクラ量間違いない。」
「変化・・じゃないね。何かの術かな?でも、なんでここに本人が。」
「めぼしい者につばつけとこうってとこだろ。」
「どうする?殺るか。」

「・・・何もしない。旧家ならともかく名家なら放置だ。」

「「分かった。」」

サスケ達三人は大蛇丸を注意しながら見つめる。
大蛇丸はクナイを返してアンコとトモルから離れる。

「どうやら今回は血の気の多い奴が集まったみたいね。フフ・・・楽しみだわ。」

今のところはアンコが一番血の気が多いが、気にしないように。

「それじゃ、第二の試験を始める前にアンタらにこれを配っておくね！」
アンコの右手に持つ物を見せる。
それは同意書の紙の束だ。

「同意書よ。これにサインをしてもらうわ。」

「・・何をだ？」

「こっから先は死人も出るから、それについて同意をとっとかないとね！私の責任になっちゃうからさ～～～。（ハート）」

笑いながらそんなことを言う。
笑いながら言うことではないのだが、忍だからなのか分からない。

「まず、第二の試験の説明をするからその説明書にこれにサインして、班ごとに後ろの小屋に行って提出してね。」

同意書を各下忍に配らせる。

「じゃ！第二の試験の説明を始めるわ。早い話、ここでは極限のサバイバルに挑んでもらうわ。」

「サバイバルですか。どんな内容かな？」

「半分以下にするとか言っていたからな。」

「殺し合いだったら楽だな。」

サスケ達三人は物騒なことを考える。

「まず、この演習場の地形から順を追って説明するわ。この第四四演習場は、カギのかかった４４個のゲート入口に円状に囲まれてて川と森・・中央には塔がある。その塔からゲートまでは約十ｋｍ。この限られた地域内であるサバイバルプログラムをこなしてもらう。その内容は・・・各々の武具や忍術を駆使した。」

誰もが固唾を飲む。

「なんでもアリアリの巻物争奪戦よ！！」

巻物争奪戦・・・それはどんな内容か。

「天の書と地の書、この二つの巻物をめぐって闘う。ここには８１人、つまり２７チームが存在する。その半分１３チームには天の書、もう半分の１４チームには地の書をそれぞれ１チームひと巻ずつ渡す。そしてこの試験合格条件は・・・天地両方の書を持って中央の塔まで三人で来ること。」

つまり、巻物を取られた１４チームは確実に落ちるのだ。

「ただし、時間内にね。この第二試験、期限は１２０時間。ちょうど五日間でやるわ！」

「五日間！！？」

「ごはんはどーすんのォ！？」

「自給自足よ！森は野生の宝庫。ただし人喰い猛獣や毒虫、毒草には気をつけて。」

チョウジはごはんが食えなくてショックを受けうなだれる。

つうか、サバイバルにごはんが届けられるわけはない。

どこのお坊ちゃまか。

「それに１３チーム３９人が合格なんてまずありえないから。なんせ行動距離は日を追うごとに長くなり、回復に充てる時間は逆に短くなってゆく。おまけに辺りは敵だらけ。うかつに寝る事もままならない。つまり、巻物争奪で負傷する者だけじゃなく・・・コースプログラムの厳しさに耐えきれず死ぬ者も必ず出る。」

ほとんど下忍がこの試験の厳しさに緊張する。

「早く合格すればいいだけの話だな。」

「なんつうか、簡単だな。」

「楽ができそうですね。演技もしなくてすみそうですし監視の目も

ないから素の自分をさらけだせますね。」

サスケ達はそんな空気の中場違いな言葉を小さな声で言う。

「続いて、失格条件について話すわよ！まず一つ目、時間以内に天地の巻物を塔まで三人で持ってこれなかったチーム。二つ目、班員を失ったチーム。又は再起不能者を出したチーム。ルールとして、途中のギブアップは一切無し。五日間は森の中！そしてもう一つ、巻物の中身は塔の中にたどり着くまで決して見ぬこと！」

「途中で見たら、どーなるのぉ？」

「それは見た奴のお楽しみ♪」

中忍になれば極秘秘文書などを扱うこともある。
信頼性を見る為だ。
もし途中で見たりすれば、それは依頼主の信頼を失うと同義だ。

「だいたい試験中なんだ。絶対罠だろ。」

「説明は以上。同意書三枚と巻物を交換するから・・その後、ゲート入口を決めて一斉スタートよ。最後にアドバイスを一言・・・死ぬな！」

アンコの一言にみんなに緊張が走る。
そして、巻物と交換の時間がきた。
次々に小屋に下忍達が入り、巻物を交換する。
そして、各ゲートに移動し待機・・スタートの合図を待つ。

キバ・ハナビ・シノチーム

「ひゃっほおお！サバイバルならオレ達のオハコだ！ハナビ、ビビるなよ！」

「そっちこそ！勝手な行動を取らないでくださいね。」

キバとハナビは言い合いをし、シノは無言である。

シカマル・チョウジ・いのチーム

「命がけかよ。めんどくせーがやるしかねーな！（こうなったらトモル狙いだ）」

「ブツブツ・・・」

シカマルは弱い奴を狙う気マンマンでチョウジはごはんが食えなくてブツブツ言ってる。

いのはそんな二人を見て不安になる。

トモル・ユラム・サクラチーム

（よーーしぃ！負けねえぇ！！近付く奴は片っ端からぶっ倒してやるぅ！！）

トモルは他の下忍を挑発する行為をし、ユラムとサクラはそんなトモルを見てイラつく。

音忍三人組

（フフ、やっとこの機会が来た。公然と我々の使命が果たせるチャンスが・・・）

彼等はいったいなんの使命があるのか？

カブトチーム

カブトのメガネがキラリと光る。
その目はなにを見ているのか？

我愛羅・カンクロウ・テマリチーム

（敵チームもそうだが、我愛羅と五日間もいるのが怖い）

カンクロウとテマリは同じチームの我愛羅に怯える。

謎の草忍三人衆（大蛇丸チーム）

「まずはルーキー狙いですね。」

「こっから殺してもいいそうだからかえって簡単だわ。」

草忍の一人に変装した大蛇丸が舌なめずりする。
はたして奴の目的は？

ネジ・リー・テンテンチーム

（ガイ先生、ボクはガンバリます！）

リーは気合いを充分にし、ネジは無言でテンテンは武具を手入れする。

サスケ・ナルト・ヒナタチーム

「どうする？」

「とりあえず、巻物を揃えてからだな。それと・・・」

「・・・了解！」

サスケ達は余裕といった感じで待つ。
そして、時間がきた。

「これより、中忍選抜第二試験！開始！！」

合図が鳴り、扉が開き全ての下忍が一斉に駆け出す。

「あの三人ですね！！」

「ガキどもを探せ！」

大蛇丸達はあるチームを探す。
第二試験が始まった。
はたしてどうなるのやら！

第二の試験（後書き）

第二試験が始まった。
サスケ達三人はどんな行動を・・・
次回、動く者達・・・

死の森の行動（前書き）

第二試験が始まった。
サスケ達はどんな動きをするのか。

死の森の行動

始まって早３０分が経った。
サスケ達三人は森の中を駆ける。

「・・見つけた。」

「よし。」

サスケ達は近くの木の枝に着地する。
サスケ達の正面の先、約十ｍくらいのところに一つのチームが駆けていた。

「あれだな。」

「さっさと殺っちまうか。」

「うん。」

三人はクナイを構え、敵目掛けて投げる。
クナイは敵の頭におもいっきり刺さり脳まで刺さる。
敵は木の枝からずり落ち、地面に激突し絶命する。
サスケ達は敵に近寄りポーチを探る。

「あった。地の書よ。」

「これで揃ったな。ヒナタのおかげだぜ。」

「ああ、ヒナタの白眼のおかげであっさり揃ったんだからな。」

始まった直後、ヒナタは白眼を使い地の書を持つチームを見つけたのだ。

「さて、これからどうする？他のチームの巻物でも奪うか？そうすれば合格チームも少なくなるしな。それとも早くゴールするか？」

「いや、ゴール近くでぎりぎりまでこの森で待つ。奪う必要もない。襲ってきたなら話は別だがな。早くゴールするのはまだいいだろ。せっかくの自由なんだ。のんびりしようじゃないか。」

「わかったわ。」

「なら、移動するか。ゆっくりな。」

方針が決まり、サスケ達はゴール付近に移動を開始した。

「とりあえず、寝床を確保だな。久し振りだからな。この森で過ごすのは。」

「確かに。」

「とりあえず、私とナルト君は一緒でサスケ君は離れた場所でね。」

「おい。それはさすがに酷いぞ。」

「サスケ君なら一人でも大丈夫じゃない。それとも何？私とナルト君の励みを見たいの？」

「そういやここんところシてなかったな。こういう野外も悪くないな。」

「はあ・・・わかったわかった。好きにしてくれ。俺は離れた場所で寝るから。」

なんていうかのんびりとした会話である。
ここは死の森なのに、敵がたくさんいるのにこれはさすがにないであろう。
しかし、彼等だからの会話である。
それよりナルトとヒナタの会話の内容は卑猥である。
二人の関係を考えれば仕方ないが。

「・・・」

「サスケ君。」

「気付いたか。」

「ああ、ていうか気持ち悪すぎ。見てるのは。」

「大蛇丸だな。」

サスケ達は離れた後方から粘っこい視線に勘づいた。
視線の正体は大蛇丸だ。
本体ではなく、分身体のほうだろ。

「どうする？殺っちまうか。」

「・・・いや、目つけられるのは嫌だからな。放置してもうゴールしよう。」

「いいの？」

「気付かないようにすれば奴は俺達を狙わないだろう。」

「じゃ、ゴールするか。」

サスケ達は大蛇丸の存在を無視して開始から二時間二十分頃にゴールし第二試験を突破した。

「私の存在に気付かないなんてどうやら見込み違いね。イタチの弟にしてはあんまり才能が無いわね。これならユラムって子のほうが才能があるわね。いらないわね。」

サスケの思惑通り、大蛇丸はサスケを付け狙うことはなくなった。

時間を巻き戻し、第二試験開始して約五十分後、キバチームは巻物を揃え塔に向かってる時、キバは何かに気付きハナビに確認してもらう。

ハナビの目に映ったのは六人の忍だ。

キバは見に行くといい、ハナビとシノは仕方なくキバの後を追う。

キバチームは近くの茂みに隠れる。
隠れた時、赤丸がブルブルと震えだした。
キバチームは茂みから様子を見る。
一つは我愛羅のチーム、もう一つは雨隠れのチームだ。
雨隠れのチームは我愛羅のチームを見下すが、我愛羅が相手を挑発する。
カンクロウが我愛羅に助言するが無視して物騒な言葉を言う。
それを聞き、雨隠れのチームのリーダーが怒り術を発動する。
傘を三つ上空に投げ仕込み千本をコントロールする。
仕込み千本を我愛羅に向かって放つ。
土煙が我愛羅を包む。
雨隠れのリーダーは殺ったと笑みを浮かべるが煙が晴れるとそこには、砂で守られた無傷の我愛羅の姿が見えた。
雨隠れのリーダーは驚愕する。
カンクロウは我愛羅の砂の盾という術の効力と性能を説明する。
普通はそんなことは喋らない。
雨隠れのリーダーは自身の術をあっさり防がれて驚愕する。
カンクロウの挑発の言葉に雨隠れのリーダーは突っ込んでくる。

「砂漠柩！」

我愛羅は印を結び、瓢箪から出た砂をコントロールし、相手の動きを捕らえる。
相手は砂に埋もれ捕えられ動けなくなった。
我愛羅は一本の傘を右手で持ち差して左手をゆっくり上へと動かす。
左手の動きと連動して相手も宙に浮かんでいく。
途中で止まり、我愛羅は相手を見る。
相手は我愛羅を見て、恐怖で顔を歪める。

「砂漠葬送！！」

左手を握ると相手は砂の圧迫で声を出すまもなく絶命した。
それと同時に血渋きが全体に飛び散り相手二人にも降り注ぐ。
正に血の雨だ。
それを見て相手二人とキバチームは恐怖する。
相手二人は巻物を差し出し見逃してもらおうとするが、我愛羅は無視して相手二人に砂漠柩を放つ。
相手二人はなんとか逃れようと動くが砂に包まれ、結局は最初に殺された相手と同じ運命にあった。
キバチームは逃げようとするが、足がくすんでゆっくりでしか動けなかった。
我愛羅は見逃さずキバチームも襲おうとするが、カンクロウとテマリによって襲おうのを止める。
我愛羅はキバチームを見逃し塔に向かう。
カンクロウとテマリも我愛羅の後を追う。

「・・・アレが一尾の人柱力か。どうみる？」

「どうみても制御ができてねえ。一尾と人柱力が不安定で情緒不安だ。」

「忌み嫌われてるからなんでしょうね。私達のように人柱力とか関係無しの仲間がいませんね。だから孤独になりやすい。」

少し離れた大木の枝に分身体のサスケ達が我愛羅の印象を言う。
なんで分身体がいるのかというと、開始と同時に影分身をし護衛対象を監視していたからだ。

「それにしても、運がよかったなキバとシノは。俺達もだけど。」

「もしこのまま攻撃をしていたら私達が介入するはめになりましたからね。ハナビはどうでもいいけど。」

「それより見ろよハナビの奴、なんか悔しそうな顔をしてやがるぜ。」

「本当。なんでだ？」

「幼くても日向の人間。自分がなにもできなかったことと、アレを見て恐怖して足がくすんでたからじゃないかしら。無駄にプライドが高いからね。」

さすがは元日向家、ヒナタの考えは当たっている。
ハナビは自分が怯えていたのが腹ただしかった。
日向家次期当主が、木の葉最強の名門が恐怖したなんて屈辱だからだ。
だからこそ、自分が悔しくて堪らなかったようだ。

「は、無駄でバカなプライドだな。早死にするタイプだな。」

「どうせ死ぬわよ。ああいう身の程知らずの愚図は。」

「・・・とりあえず、護衛は完了だな。」

サスケがそう言うと分身体三人は煙となり消えた。

開始して次の日、今トモルチームは窮地に立っている。
初日に彼等は草隠れの忍に成り済ました大蛇丸と遭遇し、トモルは気絶、ユラムは呪印をつけられ倒れている。
無傷のサクラは二人を守るため一睡もせず見張りをしていた。
そして一日が過ぎそこに音隠れの忍が現れる。
さらにサクラと音隠れの間にリーがサクラを守るように立ちふさがる。
リーは善戦したが音隠れの奇抜な術に苦戦を強いる。
サクラも戦うが大したことができなくやられる。
そこにシカマルチームがサクラを助けるために動く。
シカマルチームは連携攻撃で優位に立ち、仲間を人質にして立ち去るように言うが音忍は人質ごと攻撃をし、不利になる。
さらにネジとテンテンも現れ、更なる戦いは熾烈になるかと思われた。

「サクラ、誰だ・・・お前をそんなにした奴は。どいつだ。」

その時、ユラムが目を覚ました。
ただ、体半分が呪印に取り巻いている。
ユラムは圧倒的強さで音忍の一人を負傷させ、さらに両腕を折る。
その後、もう一人も襲おうとするがサクラによって阻止され呪印も引いていく。
一応無傷の音忍は巻物を引く手打ち料として渡し立ち去る。
数分後、トモルも目を覚まし行動ができるようになった。
ネジはユラムをジッと見つめていた。

「ふぅ、二日目でこれとは先が思いやられるな。」

「しょうがねえよ。あいつらが勝手に首を突っ込むからだぜ。」

「ま、無事でよかったですね。」

少し離れたところに分身体のサスケ達が見ていた。

「それにしてもあのユラムの奴、アレは呪印だな。大蛇丸に襲われたか。」

「むしろ好都合だ。完全に俺を付けねらわれることはなくなった。助かるぜ。」

「ネジは本当に日向家のエリートかしら。私達に気付かないなんて。」

ユラムが大蛇丸に気に入られてサスケ達は狙われなくなったため喜ぶ。

ヒナタは日向家は落ちぶれたと思う。

「あんな奴に気にするなよヒナタ。」

「嫉妬？嬉しいわ。安心して私はナルト君一筋だから。」

「それよりも、あのままだとまだ危険だからこのまま護衛をするぞ。」

「「わかった。」」

サスケ達はこの場から去ったシカマルチームの後をこっそりと追う。

五日が経過して、第二試験が終了した。
合格数は８チーム、２４名。

死の森の行動（後書き）

第二試験を突破した８チーム。
次は第三の試験・・試験内容は？
次回、第三試験・・・

命掛けの試験予選（前書き）

第三試験が始まる。

・・・が、その前に。

命掛けの試験予選

「まずは第二の試験、通過おめでとう！！」
（フフ・・第二試験受験者数８１名、ここまで２４名も残るなんてね。半分以下にするとは言ったけど、本当は一ケタを考えてたのに）

第三の試験会場は死の森の中央の塔内にある。
そこには第二試験合格者２４名と火影と推薦した班の担当上忍、さらに試験官と中忍数名がいる。
火影から見て左から音忍チーム、我愛羅チーム、カブトチーム、ネジチーム、トモルチーム、キバチーム、いのチーム、サスケチームと並んで立っていた。

いのチーム

（バクバク・・・）

（まだこんなに残ってんのかよ。クソめんどくせー！）

（ユラムくんたちも合格してたー（ハート））

チョウジは食べられなかった菓子をばりばり食べていて、シカマルは合格数を見てめんどくさそうにし、いのはユラムが合格していて

喜んでいる。

ネジチーム

（へー、あれがガイ先生の永遠のライバルね。ビジュアル的にはガイ先生、カンペキ負けだけど）

（やはり先生方の中でガイ先生が一番ナウいです！光ってます！よぉ～～～しィ！見てて下さいガイ先生！ボクも光ってみせます！！）

（やはりめぼしいところがそろったな。うちはユラムか。）

テンテンはガイとカカシの関係を見て、リーはガイを見て燃えており、ネジはユラムを見る。

音忍チーム

（・・・）

（腕のお返しはしてやるぜ。うちはユラム。）

音忍男子二人はユラムを睨む。

カブトチーム

「・・・！」

カブトは音忍の担当上忍の目に気付く。
はたして、なにを考えているのか？

我愛羅チーム

（27チーム中、たった8チームしか残らないとはな）

カンクロウとテマリはまだ8チームも残ってたことにめんどくさそうに思う。
なお、我愛羅はただ一人傷一つ無く服に汚れもない。

キバチーム

（砂の奴等・・・）
「クゥ～ン。」

（こんなにいるとは、そして・・・日向ネジ兄様）

キバは我愛羅を見て恐れており、赤丸も縮こまっている。
ハナビは上から目線で残ったチームを特にネジを見る。

トモルチーム

（何よ、木の葉のルーキーみんないるじゃない）

（なんかさぁ！なんかさぁ！火影様にイルカ先生にカカシ先生に激眉までいるぅ！みんな勢揃いって感じだなぁ！）

（フッ・・・あんまりいい予感はしねーな）

サクラは木の葉のルーキーがみんな合格したことに驚き、トモルはカカシやイルカなどがいるため感激し、ユラムは呪印が痛むらしく首を押さえる。

サスケチーム

（大蛇丸がいるな。音忍の担当上忍に化けてるな。つうか火影気付けよ。まあ俺に向いてないからどうでもいいな）

（ふわ～っ、眠い。昨日は激しくヤりすぎた。まだ眠い）

（は～、腰が少し痛い。今日が第三試験だというのを忘れてたわ。でも、気持ち良かった／／／／）

サスケは大蛇丸に気付いたが放置し、ナルトとヒナタは昨日激しくヤってたため少しお疲れのようだ。

（これほど残るとはのォ。しかも残った者のほとんどが新人。あやつらが競って推薦するわけじゃ。それに・・ナルト達もおるようじゃしのォ。）

火影は新人の担当上忍を見て、次にサスケチームを見た。

「それではこれから、火影様より第三の試験の説明がある！各自、心して聞くように！！」

火影は試験の真の目的を言う。
簡単に言えば戦争の縮図、第三の試験からは各国の大名や著名な人物、忍頭などが招待され中忍になりそうな下忍の実力を見せる。
忍達の力を見せつけ強国だといろんな人に知らしめなきゃならない。
そうでなければ依頼はこないのだ。
他にもいろいろあるが、そう言うことだ。
そのためにも、忍達は命掛けの戦いを見せなきゃならない。
何故命掛けなのか？それは己の夢や里の威厳や威信を半端な気持ちでやる者などいないのだと言わすためだ。
まあ、サスケチームにとっては火影の会話など全く興味がないわけだ。
サスケチームはすでに火影クラスかそれ以上の実力を持っている。
それに己の夢はともかく里の為なんて彼等にはどうでもいい事なのだ。

「納得いったぜぇ。」

「何だっていい。それより早くその命掛けの試験ってヤツの内容を聞かせろ。」

火影の話を聞き終え、我愛羅が第三の試験を早く始めるよう急かす。

「フム・・・では、これより第三の試験の説明をしたい所なのじゃが。実はのォ・・・ゴホン。」

「・・・恐れながら火影様。ここからは審判を仰せつかったこの、月光ハヤテから。」

そこに一人の忍が火影の前に現れる。

「任せよう。」

「・・・皆さん初めまして、ハヤテです。えー、皆さんには第三の試験の前に・・ゴホッゴホッ・・やってもらいたいことがあるんですね。ゴホッ！」

そこに現れたハヤテは顔色が悪く体調がよろしくない、そんな忍だ

「えー、それは本選の出場を懸けた、第三の試験予選です。」

「？予選！！？」

「予選って、どういうことだよ！！」

何故予選をやるのか、それは第一と第二の試験が甘かったせいか少々人数が残り過ぎてしまったからだそうだ。
そこで中忍試験規定にのっとり予選を行い、第三試験進出者を減らす必要があるようだ。
本選はたくさんのゲストが来るため、だらだらとした試合はできず時間も限られる。
そして、予選はこれからすぐやるようだ。

「これからすぐだと！！？」

誰もが気合いをいれる中・・・

「あのー、ボクはやめときます。」

カブトが手を挙げ辞退する。
カブトの突然の辞退にトモルはなんでか聞く。

（辞退するということは情報収集は終わったってことか）

（音のスパイだもんな。当然か。それに実力は上忍クラスだな）

（力を押さえてるって感じですね。ま、私達に被害はきませんからどうでもいいですけどね）

サスケチームはカブトが辞退した理由を理解し気付いた。
カブトはトモルに何故辞退するのかを嘘の理由で答える。
カブトはチームの仲間と少し会話をして退出する。
その後、ユラムの方でなにかあったが数分で終わる。

「えーでは、これより予選を始めますね。これからの予選は一対一の個人戦、つまり実戦型式の対戦とさせていただきます。一人抜けて２３名となったので合計１１回戦行い、えーその勝者が第三の試験に進出できますね。なお、一名は無条件で第三の試験に進出します。」

つまり、２３人目は予選せずに第三試験進出ができるのだ。
ルールはいたってシンプルなタイマン戦、ただ勝負がはっきりした場合はハヤテが止めに入るようだ。

「そして、これから君たちの命運を握るのは・・・」

「開け。」

「これですね。えー、この電光掲示板に・・一回戦ごとに対戦者の名前を二名ずつ表示します。では、さっそくですが第一回戦の二名を発表しますね。」

全員が掲示板を見る。
最初に出る対戦者の名前は・・・

命掛けの試験予選（後書き）

第三試験予選が始まった。
まず最初の対戦カードは？
次回、予選開始・・・

つまらない戦い（前書き）

予選が始まった。
さて、最初の対戦者は？

つまらない戦い

最初の対戦カードが決まった。

『うちはユラムＶＳ赤胴ヨロイ』

呼ばれた二人以外は上の方に移動する。
誰もが注目する。
サスケチームとその担当上忍を除いて。
試合が始まり、最初は互角の戦いをするが、ヨロイの右手がユラムの体の一部に触れ掴むとユラムの力が急に抜けていく。
実はこれはヨロイの異端の能力。
それは、相手のチャクラを吸い取る吸引術。
相手の体にあてがうだけでチャクラを吸い取ることができるのだ。
しかし、せっかくの能力も吸収だけでは宝の持ち腐れである。
ラウリ曰く吸収できるならそれを利用できないならせっかくの異端能力も無駄遣い・・だそうだ。
ユラムはなんとかヨロイから離れる。
だが、チャクラも残り少ないためどうするか思案する。
その時、トモルから応援がきてユラムはそっちに顔を向ける。
そこにユラムはトモルの隣りにいるリーを見る。
リーを見てユラムは何かを閃いた。

ヨロイはとどめをさそうと突っ込む。
次の瞬間、ユラムはヨロイを蹴りあげた。
その動きにリーとガイは気付く。

（アレはボクの！！）

（何っ！？）

その技は影舞葉・・あいての背後にぴったりとくっついて追尾する補助術。
これにより形勢は逆転し、ユラムの優位にたった。
その時、ユラムの体に異変が起きた。
呪印が発動したのだ。
このまま中止になるかとおもったらなんと呪印を押さえ付けた。
これには上忍達と大蛇丸は驚く。
サスケチームとその担当上忍は押さえこんだユラムに驚くこともなくあんまり興味もなかった。
ユラムは影舞葉から連続の蹴撃を食らわす。

「獅子連弾！！」

それが決まり勝者は・・

「第一回戦勝者うちはユラム・・予選通過です！」

ユラムが勝った。
それを見た下忍達はユラムの強さに興味などの感情を浮かべる。
サスケチームはどうでもよかった。
ユラムはカカシに連れていかれ退出した。
おそらく、大蛇丸に付けられた呪印に封印術を施すためだろう。

サスケとカカシが退出したあと、第二回戦の対戦者の発表がなされた。

『ザク・アブミＶＳ油女シノ』

シノとザクが中央に立つ。
第二回戦が始まる。
それと同時に上忍に化けた大蛇丸が会場から去る。
ザクは左手でシノに攻撃するが、あっさり受け止める。
しかし、ザクはそこから術を放ちシノを吹き飛ばす。
シノはゆっくり起き上がり立ち上がる。
その時、ザクはシノの頬からなにかが出てきてるのに気付く。
それは・・・虫！
なんと、皮膚を突き破って体の中から虫がわいて出てきたのだ。
何故体の中から虫が出てくるのかというとシノの一族に関係がある。
シノは旧家の者で秘伝の使い手なのだ。
体の中で虫を買わし虫を自在に操ることができるのだ。
ただし、その代償としてチャクラを虫に与え続けなきゃならないが。
ザクは後ろからなにかが蠢く音が聞こえ振り向くとかなりの数の虫がはい動いて近付いてきていた。
シノはギブアップを勧めるが、ザクは拒否し右腕も使いシノと虫の両方に術を放とうとする。
・・・が、放とうとした瞬間ザクの両腕が弾け右腕は千切れ飛ぶ。
何故両腕が破裂したのか？それはシノがあらかじめに虫に指示をだし、ザクの術を使うために必要な俳空口に詰めらしたのだ。
それが原因で両腕が破裂したのだ。
そして、とどめにシノはザクに近付き裏拳で殴り倒す。
これで勝敗が決まった。

「勝者、油女シノ！！」
シノはゆっくり仲間のところに戻る。
そのあとカカシが戻ってくる。
「なかなかやるな。油女一族は安泰だな。」
「あれだけ優秀なら、油女一族は恵まれとるな。」
サスケとラウリは意外とシノを高評価する。
第三回戦の対戦者が発表される。

『ツルギ・ミスミ』ＶＳ『カンクロウ』

ミスミとカンクロウが中央に立つ。
第三回戦が始まる。
カンクロウは背負ってた物を横に置く。
それと同時にミスミは先手をとる。
カンクロウは先制攻撃を防ぐ。
すると、ミスミの体が軟体動物・・まるで蛇のような感じになりカンクロウの体に纏り締め付け攻撃をする。
ミスミはカンクロウの首を締め付けながらギブアップを勧める。
カンクロウは言わない。
そして、ゴキッと音がなりカンクロウの首がブランブラン揺れる。
骨が折れたのだ。
「チィ、バカが・・・勢いあまって殺しちまったじゃねーか。」

「じゃあ今度はボクの番！」

なんと、首が折れて死んだカンクロウが動いた！
よく見ると、顔の一部がボロボロ崩れていき中身が見える。
衣服も破れ、違うものが出る。

「こ・・これは、傀儡人形！！」

傀儡人形・・忍具の一つでチャクラの糸を使って人形を操る。
これを傀儡の術と呼ばれ傀儡にはあらゆるカラクリが仕込まれている。
背負っていた物の包帯が外れ中身が見える。

（！！あっちが本体だと！？こいつ・・傀儡師！）

カンクロウは事前にカラクリとすり替えており、あたかも本体のように振る舞いていたのだ。
カンクロウは傀儡を使い、ミスミの体を締め付ける。
思いっきり締め付けられミスミの骨は砕けた。
これで勝敗は決した。

「勝者カンクロウ！！」

次の対戦者が発表される。

『うちはサスケ』ＶＳ『秋道チョウジ』

つまらない戦い（後書き）

うちはサスケの戦い・・・実力を隠しながらの戦闘。
サスケはどんな戦いを?
次回、下忍うちはサスケの戦術・・・

隠す実力（前書き）

うちはサスケ・・下忍としての戦いが始まる。
はたして・・・

隠す実力

第四回戦、ついにサスケの出番がきた。

「俺か。」

「頑張ってね。」

「頑張れよ。」

「もし勝てるなら勝っておけ。」

「ああ。」

サスケとチョウジは中央に立つ。

「頑張れ～！！」

「デブー！！」

いのとシカマルがチョウジを応援する。
もっともいのは応援と言っていいものか。

「くっ・・アイツら見てろ！この試合さっさと終わらせてギタキダ

タにしてやるぅ！」

当然、チョウジは怒る。

「まあそう言わず、よろしくねチョウジ。」

「あ、うん。こちらこそ。」

サスケは演技をし、心にもない言葉を言う。

「それでは、第四回戦始めてください！」

試合開始の合図が言う。

「忍法、倍化の術！！」

チョウジが秘伝の術で自分の体が倍化、いやさらにデブに丸くなった。

「肉弾戦車！！」

チョウジは巨大な丸いボールになって体当たり攻撃をしてくる。

「おっと！」

サスケは紙一重に躱す。

サスケはどうやって倒そうか考える。

（下忍としての俺が使える術は豪火球と変わり身と分身、あとそれなりの体術と起爆札が数枚ってところか。写輪眼は使えない。つう

か、写輪眼を開眼してない事になってるからな。この程度の攻撃なら下忍としての俺でも躱せるな。だったら時間をかけてチャクラを使わせてきれかけたところを・・・）

サスケは下忍での力でどうきり抜けるか考える。
そして、ほんの数秒で作戦を決める。

「やるね！でも、ボクの攻撃は止まらないよ！」

チョウジは連続で体当たりを仕掛ける。
だがサスケは全部ギリギリで躱すふりをする。
・・・試合が始まって5分が経った。
チョウジの体当たりが鈍くなってくる。

「くうぅ！今度こそ食らえ！」

チョウジが体当たりしてくる。

（今だ！）

サスケは起爆札付きクナイをチョウジが進行してくるであろう床に投げる。
床に刺さり、それに気付かないチョウジはそのまま突っ込んでくる。
チョウジがクナイが刺さってる床を通ろうとする。

「喝！」

起爆札が作動し爆発する。
床が飛び散りチョウジごと吹き飛ばす。

「うわ〜〜！！」

倍化の術が解け、元の体に戻り床に倒れる。
チョウジはなんとか起き上がろうと立ち上がる。

「もらった！」

サスケはチョウジに接近する。
サスケは立ち上がったチョウジに殴りつける。

「ぐわっ！」

「おりゃああ！！」

サスケはそこから連続攻撃でチョウジを追い詰める。
チョウジは防御もできずモロに食らいまくる。

「だだだだ！！」

「うぐぐぐっ！」

チョウジのお腹にサスケは連続パンチを食らわす。
チョウジはお腹を押さえ苦しみながら後退りする。

「これで・・・終わりだ！！」

サスケはジャンプからの右跳び回り蹴りを食らわした。

「ぐああっ！」

チョウジは顔面をモロに食らい吹っ飛びそのまま仰向けに倒れた。
チョウジは動けなくなった。
うわ言に肉～っと言っている。

「勝者、うちはサスケ！」

勝利宣言をもらい、サスケは軽く息をはき、ゆっくりナルト達のところに戻る。
さて、サスケの戦いを見た忍達の感想を聞いてみよう。

トモルチーム

「チョウジに勝ったぁ！やるなあぁ！」

「なによ！ユラム君のほうがずっと強いわよ！」

「・・・」
（あれがあのイタチの弟か。はっきりいってユラムにはかなり劣る。
それに写輪眼も開眼してなさそうだ。期待はできないな）

キバチーム

「ケッ！全然大した事ねえな！」

「こんなものですか。うちはも落ちたものですね。」

（ユラムとは差があるわね。悪いけでうちのチームが誰が相手でも
勝てるわ）

シカマルチーム

「負けちまったか。」

「あ～んもう、残念。」

「まあ・・負けたけど焼き肉ぐらいは連れてってやるか。」

ガイ班

「ユラム君よりは強くないですね。才能はあるのに。」

「仕方ないさリー！これも青春だ！」

「ふん！話にもならん。名家の名が泣く。」

「う～ん、さっきのユラムって子のほうが強そうだったわね。」

音忍

「・・・どうでもいいですね。」

「なんか、標的より弱いね。」

我愛羅チーム

「本当にあいつうちはか？なんかたいしたことないじゃん。」

「さっきの奴が強かったってだけだろ。」

「フン・・・」

火影達

「あんな腕じゃ、大蛇丸が狙う理由がないね。」

「実力は下忍でも真ん中くらいだな。まだ中忍になるには早いな。」

（ほっほっほっ・・さすがはうちはサスケじゃな。上手く手加減しとるのォ。他の奴等はそれに気付いとらん。）

サスケチーム

「さすがはサスケ。上手い。」

「よかったですね。相手が倒せるレベルで。」

「相手のチャクラを減らして勝てる優位に立つ。さすがだな。そのおかげで下忍として誤魔化せましたな。」

サスケはナルト達と合流する。

「お疲れ様。」

「予選突破おめでとうございます。」

「どうも。」

さて、次の対戦者が発表された。

『春野サクラ』ＶＳ『山中いの』

勝負の結果は引き分け。
はっきり言ってしまえばかなりつまらない戦いだった。
下忍の下同士の戦いだった。
サクラはともかく、いのは元々戦闘向きのくの一だ。
どちらかといえば情報収集向けの忍なのだ。
さて、次の対戦者の発表。

『テンテン』ＶＳ『テマリ』

勝者はテマリ。
これは相性の問題だ。
テンテンは忍具を使った戦術が得意、対してテマリは巨大な扇子を使った風遁術が得意。
どれだけ手裏剣やクナイを投げても、テマリの風遁術の前では無力であり逆に返り討ちにあったのだ。
さて、次の対戦者は？

『キン・ツチ』ＶＳ『奈良シカマル』

勝者はシカマル。
最初はキンが優位だったがシカマルの得意忍術、影真似の術で捕らえさらに戦略で勝利した。

「やるなシカマル。奈良家は頭がいいのが多いな。奈良家はそういう遺伝なのか？」

「奈良家なら有り得るだろう。この年でその頭脳とは将来が楽しみだな。」

さて、次の対戦者・・８回戦は？

『波巻ヒナ』ＶＳ『日向ハナビ』

隠す実力（後書き）

ヒナタの対戦相手は・・・日向ハナビ。
ナルトの対戦相手は？
次回、愚かな日向兄妹・・・

自惚れの日向兄妹（前書き）

ヒナタとハナビ、勝負の行方は？
そして、ナルトの対戦相手は？

自惚れの日向兄妹

「まさか、次期当主ととはな。」

「どうする？殺っちまうか？」

「だめよ。殺ったら私達の存在がバレるわ。」

「確かに・・・なら、どうしますか？」

「わざと負けるわ。私に任せて。」

ヒナタはサスケ達と会話し、中央に立つ。

ハナビと対峙する。

「始める前に言っておきます。あなたに私は勝てません。棄権しなさい。」

「・・・残念ですが、そう簡単に負けるわけにはいきません。」

「そうですか。わかりました。どうなっても知りませんよ！白眼！！」

ハナビが白眼を発動する。

そして、ハナビは日向の構えをとる。
ヒナタは普通の構えをとる。

「それでは、始めてください！」

ヒナタは手裏剣を投げ牽制する。
ハナビは軽く躱す。
投げた直後、ヒナタは接近戦を仕掛ける。

「やあああ！」

ヒナタは拳や蹴りをしてくるが、ハナビは躱しいなして防ぐ。
そのままハナビカウンター攻撃の一撃をしてくる。

「ハアッ！！」

「グッ！」

ヒナタは紙一重で躱すが、体に掠り腹を押さえる。
何故掠っただけなのにヒナタは腹を押さえてるのかというと、それは日向家特有の体術にあるからだ。
日向家は体内を攻撃する体術、通称柔拳を使う。
外見は頑丈にできてる忍でも、内面を攻撃されればただではすまない。
さらに、白眼でさらに有効だが打てる。
日向家が強いのはこれのおかげなのだ。
ただし、ヒナタは別格だがそれを知るものはサスケチームと火影、ダンゾウとイタチだけだ。

「・・・さすがは名家の忍ですね。強い・・・」

「私は日向家次期当主です。最強なのです。私に負けるのを誇りに思いなさい。続けますよ。」

ハナビは構える。

しかし、ヒナタは構えない。

「どうしました？何故構えないのですか？バカにしてるのですか？」

「いえ・・・審判。この試合、私の負けです。ギブアップします。」

ヒナタはギブアップを宣言した。

「ゴホッ・・・わかりました。よろしいのですね？」

「はい。」

「わかりました。・・・勝者、日向ハナビ！」

ヒナタとハナビはチームの元に戻る。

「お疲れ様。」

「仕方ないな。」

「ハナビという小娘は自意識過剰のようだな。勝った気でいるとは井の中の蛙だな。ま、所詮そんなものか。」

サスケチームはヒナタを労う。

「それにしても攻撃が掠った時、ヒナタはチャクラの膜を貼ったのに全然気付かなかったのか？はっきりいってダメージはほぼ０だぜ。」

「白眼があるのに気付かんって飾りなのか？さすがは日向家次期当主（笑）だな。」

「日向ネジも気付かなかったな。日向家下忍がこれでは、将来はお終いだな。」

実は、ヒナタは掠る直前にチャクラの膜でガードしたのだ。

「日向家なんて所詮そんなもんよ。自惚れの強い名家だからね。」

その間に次の対戦者の発表がされる。

『遠野トモル』ＶＳ『犬塚キバ』

二人は中央に立つ。

試合が開始する。

キバは獣じみた体術と赤丸との連携でトモルを苦しめる。

対するトモルは影分身と変わり身を使った戦術でキバを翻弄する。

勝負の結果はトモルの勝ちだ。

トモルの奇策でなんとか勝てた。

次の試合は？

『日向ネジ』ＶＳ『渦風ナル』

ネジは中央に降りようとするが、その前にナルトがありえない言葉を言う。

「審判・・・俺は棄権する。」

『『『『え！？』』』』

「なに！？」

なんと、ナルトは棄権すると言った。
誰もが何故？っと疑問をいだく。

「棄権・・ですか。いいのですか？」

「構わない。俺は棄権する。」

「・・・わかりました。渦風ナルが棄権した事により日向ネジ、不戦勝で予選通過です。」

なんともあじけがなくあっさりと終わった。
他の下忍達はナルトの棄権に怒る。
何故戦わないのかと。

「どういう事だ。何故戦わない。何故棄権した。」

「・・・俺じゃアンタに勝てねえよ。だから棄権した。ただそれだけだ。」

「ふん・・・懸命な判断だ。貴様ごときでは日向家に勝つ事は不可能だ。」

ネジはナルトが何故棄権したのか聞き、ナルトは当たり障りのない解答を言う。

ネジは納得してナルトを見下す。

「バカじゃねえか。白眼はやはり飾りだな。」

「これが私が元いた日向家・・・抜けてよかった。」

「哀れを通りこして空しいな。」

サスケチームはネジを小馬鹿にした。

さて次の試合・・・最後の試合の対戦者のカードは？

『ロック・リー』ＶＳ『我愛羅』

自惚れの日向兄妹（後書き）

予選最後の試合。
努力の天才対一尾の人柱力、はたして・・・
次回、予選終了・・・

予選終了（前書き）

予選最後の試合。
はたして・・・

予選終了

掲示板に載ったリーと我愛羅は中央に立ち、対峙する。
リーは体術の天才。
努力家でかなりの実力者。
対して我愛羅は一尾を宿した人柱力。
砂を使った防御を得意とし自在に操り翻弄する。

「どっちが勝つかな？」

「我愛羅だな。一尾の人柱力だしあの砂は厄介だな。」

「問題はリーがどれだけあの我愛羅に食いついていけるかだね。」

「あのガイのもとで修行しているのです。おそらく体術の禁術を使えると考えたほうがいいでしょう。」

サスケチームはどんな試合になるか、特に我愛羅の実力に興味を持った。

「それでは・・始めてください！」

開始の合図がされたと同時にリーが駆ける。
そのままリーは我愛羅に蹴りをいれるが、砂の盾によりあっさり防

がれる。
我愛羅が砂を操ることにサスケチームと我愛羅チーム以外は驚く。
リーは我愛羅に連続攻撃を仕掛けるが全て、砂の盾に防がれる。
時々、砂が迎撃するがリーは躱す。

「なかなか厄介な盾だな。オートな分余計にな。」

「だが、リーに忍術や幻術が使えないのは厳しいな。」

「仕方ないわ。彼にはその才能が無いのよ。」

「俺が調べた所、リーはアカデミー時代は全くノーセンスだったようだ。それから体術がここまで伸びたのは一種の才能だろう。」

そう・・実はリーは体術しかできないのだ。
忍術や幻術の才能が全くなし。
その為残された道は体術しかなかったのだ。

「だが、それだけで決めるのはマヌケな奴等のみだ。」

「ああ、体術は体の資本だ。体術捌きの有無で勝敗が決まるようなものだ。忍術や幻術だけを極めた奴は体術がからっきしで体力もない。だからチャクラ切れが早い。」

「スタミナが多ければ術を多く使いこなせるし威力も倍増する。」

「体術の最大の利点は印を組まない事だ。印を組む必要もない上に単純な体捌きがものをゆう。それに・・あのリーという少年、まだなにかあるようだしな。」

リーは印を組んだ石像に飛び乗る。

「リー！外せーー！！」

「！で、でもガイ先生！それは・・・大切な人を複数名守る場合の時じゃなければダメだって！」

「構わーーん！！オレが許す！！！」

ガイの許可を聞き、リーは笑う。
リーは足にある物を外す。
それは・・・

「重りか。」

「古典的な修行法だな。問題は・・・」

「あの重りがどれくらいなのかだね。」

「ガイだからな。ヘタをすればかなりの重量かもしれないな。それだと、勝負は分からないな。」

リーは両足の重りを外してそれを床に落とす。
落ちた重りは床を陥没させひび割れが起こり凄い音が聞こえた。
そのあまりの重さにガイ以外は驚く。

「すげえな！あの重り、なんつう重量だよ！」

「床がめり込むなんて。凄いですけどやりすぎでしょ。」

「さすがはガイ・・・我らの予想を上回っていましたね。」
「・・・俺達もこういう修行をしたほうがいいのかな？」
「「それは却下。」」
サスケチームもリーのつけてた重りに驚く。
サスケは自分達も重りを付けようかと言うがナルトとヒナタは却下する。
「行けー！！リーー！！！」
「オーーッス！！！」
ガイの雄叫びにリーが答えるとリーは一瞬で消えた。
次の瞬間、リーは我愛羅の背後に移動していた。
そしてそのまま殴ろうとするが寸前で砂の盾が防がれる。
そのすぐにまた高速で移動しまた背後から攻撃するがまた砂の盾で防がれる。
それが連続で続きそして一発の正拳突きが我愛羅の顔面の横を掠める。
誰もが惜しいと思う。
だが、それ以上にリーの速さに驚く。
リーは連続攻撃を続ける。
さすがの我愛羅も直立不動のままとはいかず周りをキョロキョロしだす。
そして、ついにリーが砂の盾を潜り抜け我愛羅の頬に傷を付けた。
我愛羅にリーのかかと落としが決まったのだ。
それを見た者達は驚く。
特に砂チームは驚愕といった感じの表情で見た。

「青春はーー!!ばっくはっつだーーー!!!」

ガイの雄叫びにリーはますますスピードをまして突っ込む。
我愛羅は砂で抵抗するがリーの速さについてこれずほぼなにもできない状態だ。
リーが攻撃するがやはり砂の盾に防がれる。
ただし徐々に砂の盾が追いつかなくなる。

「こっちですよ!」

そしてついにリーの拳が砂の盾を抜け、我愛羅の顔面にヒットした。

「速いな。下忍のいや、中忍のスピードじゃないな。おそらく上忍並のスピードだ。これなら砂の盾も追いつかないな。」

我愛羅はゆっくり起き上がり、顔を上げる。
するとなにかが崩れる音が聞こえる。
見ると我愛羅の顔がボロボロ崩れる・・いや、顔ではなく砂であった。
我愛羅は砂をまといリーの攻撃を防御していたのだ。
我愛羅の表情は笑っていた。
まるで、獲物を見つけた肉食動物のようなそんな表情を。

「砂をまとってたおかげで無傷か。便利だな。」

「まるで鎧のようだな。まさしく砂の鎧だな。」

「二段がまえの防御ですか。厄介ですね。しかし、鎧を展開した時チャクラをかなり消費してるようね。」

「それに、鎧とはいえあの防御力は低いようだ。それに砂を体に密着させるという事は体が重くなり体力も使うという事になるな。」

サスケチームはすぐに我愛羅の砂の鎧の能力と弱点に気付く。
リーは腕にある包帯をほどき技を出す構えを取る。
リーは我愛羅の周りを高速で走り回る。
そして、一瞬で我愛羅の懐に入り顎を蹴り上げる。
しかし、砂をおかげか簡単に上がらない。
そこでリーは連続蹴りで上がらせる。
そして、包帯で我愛羅を巻き身動きできなくし。

「表蓮華！！！」

リーの表蓮華が決まる。
誰もがやったと思う。
だが、リーは我愛羅を見る。
見ると我愛羅の顔はボロボロと崩れていた。

「身代わりだな。リーが連続蹴りをしている最中、一瞬だが痛みで目を瞑った。その時だな。」

「その一瞬を見逃さなかった我愛羅も大したものだな。」

「運がよかったわね。もし直撃だったらかなりのダメージになってたわ。」

「これで、リーの動きは悪くなったな。我愛羅の有利だな。だが、あの一尾の人柱力は情調不安定だからな。何しでかすかわからん。」

サスケチームはリーの攻撃が何故外れたのか瞬時に分かった。
ラウリの言葉通り、我愛羅の攻撃はジワジワとなぶり殺すようなやり方だ。
リーはなぶられ続ける。
しかし、何撃目の攻撃を食らう寸前リーの動きが変わった・・いや、元に戻った。

「リーの動きが戻った？どういう事だ？・・・あれか。」

「まさか・・・下忍であの禁術を使えるというのか！？」

「？ラウリ、どういうことだ？説明しろ！」

「・・・リーは、裏蓮華をする気だ。」

「裏蓮華？なんですかそれは？」

裏蓮華・・・それは体術の禁術中の禁術。
体内にある八門遁甲と呼ばれるリミットをいくつかを無理矢理外して繰り出す術だ。
ただし、八門を無理矢理外すと本来の何十倍の力を引き出す代わりに術者の身体を崩壊していく。
八門全てを開けると火影すら上回る力を手にする代わり術者は死ぬ。
正に禁術なのだ。
リーは構える。
リミッター外しをするようだ。

「第三正門・・開！！」

第三正門を開く。

すると、リーの体の色が赤くなった。

「さらに、第四傷門・・開！！！ハアアァァア！！！」

さらに第四傷門を開く。

普通の下忍ならこれでもう動くことができないのに、リーは鼻血を出すだけでとどまる。

「なんていう下忍だ。たった鼻血だけですむとは。」

「努力でどうこうなるもんじゃないな。これは正に才能があったんだな。」

「動くぞ！」

ナルトの言葉と同時にリーが動く。

動いた瞬間、床がひび割れ土煙が舞う。

そして我愛羅が蹴られた音が聞こえる。

誰もが我愛羅とリーの姿を見失う。

「我愛羅は上だな。リーは我愛羅の周りを超高速移動で動き回っている。写輪眼じゃなきゃ見えなかったな。」

「速ええ！砂がまるでついていってねえ。チャクラの探知でなんとか見切れる。」

「この速さ、人体にただではすまないわ。リーはそれを承知で覚えたのね。」

「まさに禁術だな。これほどとは、それを習得したリーもたいした

ものだ。」

サスケチームはリーを称賛し高評価する。
空中で我愛羅はあらゆる方向に飛んでいく。
下忍達には見えないが、リーが攻撃しているのだ。
我愛羅はリーの攻撃を全て食らい、鎧が剥されていく。

「これで最後です！！第五杜門・・開！！！」

最後の攻撃をするようだ。
リーが我愛羅の腹を攻撃し、我愛羅は地面に吹き飛ぶが途中で止まる。
よく見ると我愛羅の体にリーの腕にある包帯が巻かれ掴まれていた。
リーは包帯をおもいっきり自分の方へと引っ張る。

「はあああ！！裏蓮華！！！」

右の掌底と右足の蹴りが同時にヒットし、おもいっきり地面にたたき付けられる。
落下中、我愛羅の瓢箪が砂に変わっていく。
そして我愛羅は床に激突し、リーはその横に落下し倒れる。

「あの瓢箪、砂でできていたのか。あれで落下の衝撃を弱めれたな。だが、かなりのダメージはあるはずだ。」

「しかし、それ以上にリーのダメージは大きい。裏蓮華中に筋肉が切れた音が聞こえた。あととどめの時右手足の骨がひび割れた音が聞こえた。もう動けないだろうな。」

サスケとラウリはリーと我愛羅のダメージ蓄積量を冷静に分析する。

我愛羅の砂がリーに迫る。
リーは這いずりながらも避けようとするが左手足が掴まる。
「砂漠柩！！」
「ぐわあああああ！！」
砂の圧迫で左手足が折れる。
さらに砂がリーを襲う。
とどめをさすのだろう。
だが、ガイが乱入し我愛羅の砂をはらう。
それを見て、我愛羅は頭を押さえ苦しむ。
我愛羅は何故助けたのか聴く。
「こいつは・・愛すべきオレの大切な部下だ。」
それを聞き、我愛羅は戦うのをやめた。
「勝者、我愛羅！」
勝者は決まった。
だが、ガイの後ろに倒れているリーが立ち上がり構える。
誰もが信じられなかった。
五門開けて手足を潰され人体の筋肉が切れてるのに立ち上がったのだ。
立てるハズがないのにだ。
ガイがリーに近付く。
顔を見てガイは気付き涙を流す。
なんと、気を失いながらも戦おうとしたのだ。
それに誰もが驚愕した。

「ロック・リー・・・なんて奴だ。気を失ってるのに戦う姿勢を崩さないとは。」

「ロック・リー・・彼もまた、立派な忍だったのだな。その立派な姿勢、評価に価する。」

サスケとラウリはリーを評価する。
リーは医務班に運ばれる。

「ヒナタ。リーをどうみる？」

「・・・忍としての機能はもうできないでしょうね。禁術を染めたのならその覚悟があったハズ。」

ナルトはリーがどうなるか聞くとヒナタが簡潔に答える。

「えーー！ではこれにて第三の試験予選、全て終わります！」

予選終了（後書き）

予選終了しいよいよ本選。
しかし、火影から出た言葉は？
次回、準備期間・・・

準備期間（前書き）

予選が終了した。
いよいよ残すは本選のみ。

準備期間

予選が終わり、勝者達は中央の印の石像の前に集まる。

「中忍試験第三の試験、本選進出を決めた皆さん。ゴホッ・・一名はここにいませんが、おめでとうございます。」

ハヤテが合格者を祝う。

（ここにおらんうちはユラムを含め、木の葉七名に砂三名、音一名か）

音一名ことドス・キヌタは対戦者はいないため不戦勝である。

「えー・・では、火影様・・どうぞ。」

「うむ。・・・ではこれから、本選の説明を始める。」

本選の説明が始まるとわかり、勝者達は緊張して聴く。

「以前もはなしたように本選は諸君の戦いを皆の前でさらすことになる。各々は各国の代表戦力として、それぞれの力をいかんなく発揮し見せつけて欲しい。よって本選は・・・一ヶ月後に開始される！」

一ヶ月後・・・その言葉に誰もが疑問に感じた。
これからでなく、何故一ヶ月後なのか？それは火影の次の話で分かった。

「これは、相応の準備期間というヤツじゃ。」

「どういう事だ？」

誰もが思った疑問をネジが聞く。

「つまりじゃ・・各国の大名や忍頭に予選の終了を告げるとともに、本選への召集をかけるための準備期間。そしてこれは、お前たち受験生のための準備期間でもある。」

遠回しな言いかたをする火影。

「だから意味分かんねーじゃんよ！どういうことだ？」

「つまり、敵を知り己を知るための準備。予選で知り得た敵の情報を分析し、勝算をつけるための期間。これまでの戦いは実戦さながら、見えない敵と戦う事を想定して行われてきた。」

（なるほどな。確かに、砂以外は我愛羅が砂を使った術を使うなんて思わなかっただろうな。ま、俺には関係無い事だ）

サスケは大変だなと感じながら他の奴等を見る。
もっともサスケ本人はあまり興味が無い。

「しかし、本選はそうではない。宿敵たちの目の前で全てを明かしてしまった者もおるだろう。相対的な強者と当たり傷付き過ぎた者

もおるじゃろうて。公正公平を期すため、一ヶ月間は各々更に精進し励むが良い。もちろん体を休めるも良し！」

つまり、本選には大名や忍頭がくる。
だが、すぐに来るわけがない。
最低でも一ヶ月はかかる。
ならば、その期間を有効に使えということだ。
中忍になるために。

「というわけでじゃ・・・そろそろ解散させてやりたいところじゃが、その前に一つ本選のためやっとかなきゃならん大切な事がある。」

誰もがイラつき始める。
サスケも早く帰りたいようだ。

「なんだよぉ！」

「まぁ、そう焦らず。アンコの持っとる箱の中に紙が入っとるからそれを一人一枚取るのじゃ。」

「私が回るから順番にね！一枚だけよ！」

一人ずつ一枚紙を取る。
紙を広げると数字が書いてある。

「よし、全員取ったな。では、その紙の数字を左から順に教えてくれ！」

ドス「11だ。」

トモル「1だぁ。」
テマリ「9。」
カンクロウ「7。」
我愛羅「5。」
シカマル「10。」
ハナビ「3です。」
ネジ「2。」
シノ「8。」
サスケ「4。」
「ということは、6番が彼ですぬ。」
「うむ！ではお前たちに本選のトーナメントを教えておく！！」
トーナメント・・まさかそのためのくじ引きだったとは誰もが思わなかった。
組み合わせの表が見せられる。
誰もが緊張した面持ちで見る。
一回戦『遠野トモル』VS『日向ネジ』

二回戦『日向ハナビ』ＶＳ『うちはサスケ』

三回戦『我愛羅』ＶＳ『うちはユラム』

四回戦『カンクロウ』ＶＳ『油女シノ』

五回戦『テマリ』ＶＳ六回戦の勝者

六回戦『ドス・キヌタ』ＶＳ『奈良シカマル』

トーナメント表を見て安堵した者、困った顔をする者、笑みを浮かべる者、どうでもいいといった者、様々である。

「では、それぞれ対策を練るなり休むなり自由にするがよい。これで解散にするが何か、最後に質問はあるか？」

「ちょっといいっスか？」

「うむ！」

「トーナメントってことは、優勝者は一人だけって事でしょう。つーことは、中忍になれるのはたった一人だけってことっスか？」

それはシカマルなどの頭が良い者だけが気付いたことである。

「いや！そうではない。この本選には審査員としてわしを含め、風影や任務を依頼する諸国の大名や忍頭が見ることになっておる。この審査員たちがトーナメントを通してお前たちに絶対評価をつけ、中忍としての資質が十分あると判断された者は・・・例え一回戦で負けていようとも中忍になることができる。」

つまり、ここにいる全員が中忍になれる場合やその逆に誰一人中忍になれない場合などもあるのだ。
勝つということは自身のアピールをする回数が増えるということだ。つまりトーナメントとは、自身のアピールを増やすための試合でもあるという事なのだ。

「ではご苦労じゃった！ひと月後まで解散じゃ！」

解散と言われたため、サスケはナルト達と一緒に会場を出る。

「俺はダンゾウ様のところに戻り一度報告しにいく。それでは。」

ラウリはそう言い瞬身の術で去る。

「俺はもちろんヒナタと一緒にいるぜ！」

「私もナルトと。」

サスケは分かってるという感じで手を前に出す。

「俺は・・・どうしようか。修行をしながらのんびりするか。」

方針が決まりサスケはナルトとヒナタと別れる。
期限は一ヶ月・・・その時、なにが起こるのか。

準備期間（後書き）

一ヶ月・・・それは長い休日。
サスケはこの一ヶ月をどう過ごすのか？
次回、一ヶ月期間・・・

一ヶ月（前書き）

準備期間。
三人はどのように過ごす？

一ヶ月

予選を終え、早一週間が経過した。
サスケは修業をしながらのんびりしていたが、途中で飽きた。

「修業ばっかりでヒマだな。・・・散歩でもするか。」

サスケは修業を止め、散歩に出掛ける事にした。
サスケは町を見ながらゆっくり歩いて渡る。
そもそもサスケ自身、町をゆっくり周った事が無い。
任務ばっかりで無くても修業ばっかりという生活をしているのだ。
だから、こうしてゆっくり散歩をするのは初めてである。

「ふ～む・・こうして町を散歩するとはな。こうしてのんびりするのも悪くないな。」

「お～い！サスケ！」

すると、どこからサスケを呼ぶ声が聞こえてきた。
声が聞こえた方に向くと、そこにシカマルとチョウジとアスマが焼き肉屋の前に立っていた。

「シカマルか。どうしたんだ？チョウジとえ～と・・・」

「ん？そういえば自己紹介してなかったな。俺はこいつらの担当上忍の猿飛アスマだ。」

「あ、はい。うちはサスケです。」

サスケはすぐに下忍としてのサスケにシフトチェンジする。

「おう！よろしくな！」

「それにしても、どうしたんだ？俺を呼んだんだ？」

「ああ、実はな。」

「サスケ、ボク達と一緒に焼き肉を食わないか？」

「え？」

チョウジが突然焼き肉を一緒に食わないかと言ってきた。
何故かと聞けば、アスマが焼き肉をおごってくれるそうだ。
本当はいのも呼ぶつもりだったが来れないそうなので三人で食おうと思ってたようだ。
そこにサスケが歩いてたから一緒に食べないかと誘ったようだ。

「・・・嬉しい申し出だけどやめとくよ。そんなにお腹が空いてないから。」

「そっか。悪いな、止めちまってよ。」

「いや、それじゃあ。」

サスケはシカマル達と別れ、散歩の続きをする。
その時、空を飛ぶ鳥にサスケは気付いた。
（すぐにこいだと？ダンゾウの奴、いったいなんの・・・まさか、任務か？）
サスケはすぐにダンゾウがいる根のいる拠点に移動する。

サスケが散歩をしている頃、ナルトとヒナタはデートをしていた。
今いる場所は少し離れた森の中にいる。
「う～ん、こういうデートも悪くないな！」
「そうね。フフ・・予選の時、負けてよかったって本当に思うわ。」
「全くだぜ。サスケはご愁傷様としか言い様がないな。」
ナルトとヒナタは楽しくデートをし森を歩く。
そこでナルトとヒナタはなにかに気付き見つけた。
「おい、あれ・・」
「トモルと確か・・伝説の三忍の一人の自来也・・・だったわね。」
ナルトとヒナタが見つけたのは自来也とトモルだった。
どうやら修業の最中のようだ。

トモルは自来也から口寄せの術を教えてもらってるようだ。
しかし、全然成功してない。

「どうして自来也がいるのかしら？」

「俺を探してるのか、それとも大蛇丸か。そのどちらかだな。」

「ナルト君のこと、火影様が言ってなきゃいいけど。」

「そうだな。とりあえずここにいてはいかんな。移動しようか。どっか人気のないところに行って一発ヤるか。」

「そうね。ふふ・・恥ずかしいわね。あの時できなかったからね。楽しみだわ。ナルト君、優しくそして気持ち良くしてね。」

「分かってるぜ。そんじゃ離れますか。」

ナルトとヒナタは移動する。
その後二人は他にもネジやシノの修業を見、誰も通らないところで楽しんだ。

ダンゾウに呼ばれ、サスケは今ダンゾウがいる場所にいる。

「ダンゾウ、俺を呼んだのはなんだ？つまらん理由じゃないだろうな。」

「お前からすればつまらんだろう。だが、一応な。」
ダンゾウはもったいぶった喋りをする。
サスケは少し苛立つ。
「自来也がこの里にいる。」
「自来也？伝説の三忍のか。なんでだ？・・・ナルトか。」
「ご明察。奴はナルトが生きてると信じている。だからこの里に来たようだ。」
サスケは自来也がどういう存在か調べたため知っている。
だから自来也がナルトを探すのは当然だ。
「やっぱり死体を用意しときゃよかったな。死体がないから奴は探してるのだろう。そういえばあのカカシもそうだったな。」
「確かに、それは儂の失策だな。ナルトのは死体を用意しとけばよかったな。」
「まあすぎたことは仕方ない。火影はナルトが生きてることを伝えたのか？」
「いや、その辺は口止めしたしお前の約束のおかげでなんとか誤魔化しておいてくれたようだ。」
火影は自来也にナルトが生きてることを伝えようとしたがサスケ達の約束のため喋らなかった。
サスケ達との約束とは、ナルトとヒナタが生きてる事を絶対に言わ

ないという約束。
それを条件に三人は里の為に暗部として活動すると、拒否したら里を抜け出すと言った。
火影は仕方なく約束した。

「火影と約束してなきゃ、バレてたな。しかしそれで納得しないだろうな。」

「ああ、奴はナルトを探すだろうな。おそらくカカシとな。」

「それはかなり困るな。演技でごまかせるとはいえ相手は三忍、バレる可能性があるな。カカシまでだとめんどいな。写輪眼があるからな。今までは使われてないが使われたら厄介だな。ナルトには十分に気をつけるように言っておく。」

「わかった。」

サスケの言葉にダンゾウは納得した。

「用はそれだけか？」

「ああ。」

「なら失礼する。」

サスケは瞬身の術で去った。

「・・・あと二週間。それで今後の木の葉の運命が決まる。せいぜいあの三人にはしっかり働いてもらう。ふっふっふっ・・・」

日が過ぎていく。
サスケはダンゾウにあった次の日にナルトに自来也がきている事を話す。
ナルトは昨日、自来也を遠目で見掛けたと答えた。
これからは気をつけるように注意する。
それからはサスケは修業をし、時々散歩をしたりして過ごした。
ナルトとヒナタはデートをし、たまにサスケの修業を手伝ったりした。
そうして一ヶ月が過ぎていった。
その間にいろいろな事が里で起こっていた。
ドスが我愛羅に勝負を挑んだがあっさり返り討ちにあい殺されたり。
カブトと砂の担当上忍が密会し音と砂が同盟していたり、カブトを尾行していたハヤテが気付かれ砂の担当上忍バキの手により殺されたり。
ユラムが病室を抜け出しカカシと一緒に修業をしたり。
我愛羅が病室で眠っているリーを殺そうとするがトモルとシカマルが食い止め、二人は我愛羅の恐ろしさに気付きガイが止めたり。
そうして時は過ぎていく。
しかし、サスケ達にすればどうでもよく関係の無い事だった。
そして、第三試験本選当日がきた。

一ヶ月（後書き）

ついに本選当日。
まずは変更やルールを知る。
次回、本選開始・・・

本選当日（前書き）

一ヶ月の準備期間は終了した。
さあ、戦う時だ！

本選当日

今日は本選当日、この日は中忍候補の有望な忍達の戦いが見れる日。
そして、とても大きな事件が起こる日でもある。
会場にはたくさんの人々がいる。
観客席にはたくさんの客と忍頭達、大名達がいる。
そして中央には9人の下忍と審判の特別上忍が立っている。
本当は１１人だが二人足りない。
観客席でも特別席には火影が座っており、そのそばには特別上忍が一人。
そこに風影と護衛の上忍二人が現れた。
風影がイスに座り火影が立ち上がる。

「えー、皆様このたびは木の葉隠れ中忍選抜試験にお集まり頂き、誠に有り難うございます！！これより予選を通過した１０名の本選試合を始めたいと思います！！どうぞ最後まで、御覧下さい！」

１０名・・・火影はそう言った。
本当は１１名なのに、何故一人減ったのか。
簡単だ、我愛羅がドスを殺したからだ。
そのため変更があり、シカマルの対戦相手はテマリとなった。
ユラムはまだ来ていない。

「いいかてめーら、これが最後の試験だ。地形は違うがルールは予

選と同じで一切無し。どちらか一方が死ぬか、負けを認めるまでだ。ただしオレが勝負が着いたと判断したら、そこで試合は止める。分かったな・・・」

誰もが緊張する。

「じゃあ・・・一回戦。遠野トモル。日向ネジ。その二人だけ残して・・・他は会場外の控室まで下がれ！」

トモルとネジを除いた下忍達は会場外の控室に移動する。
ちょうどその時、ナルトとヒナタが会場に到着し観客席に座る。

「いよいよ始まるな。」

「ええ。どうなるのかしら？」

「さあな。ただ・・・俺達は俺達のすべきことをするだけだ。」

「そうね。それにしても、暗部の数少なくない？」

確かに会場内にいる暗部の数は少ない。
１０にも満たない数の暗部しかいない。
警戒するにしてもこれは少ない。

「確かに。警戒はしてるのだろうが、少ないな。里周辺の方を警戒してるのか？」

「可能性は高いね。でも今はこの試験に集中しよう。」

「だな。そろそろ始まるしな。」

ナルトとヒナタは試験に集中する。

「では第一回戦・・・始め！！」

本選当日（後書き）

ついに本選が始まった。
まずは一回戦と二回戦。
次回、節穴の日向家・・・

哀れな日向家（前書き）

本選第一回戦・・・
始まりの合図がなる。

哀れな日向家

審判の合図がなりトモルはその場で構え、ネジは白眼を発動し日向家の構えをとる。
トモルはカカシから聞いた日向家の白眼や柔拳がどんなものか思い出していた。
トモルは影分身四体ほど出して様子を見ることにした。
分身体四体がネジに攻撃を仕掛けるが、ネジはなんなく四体の分身体を倒した。
トモルは今度は多数の分身体を出した。
多数の分身体はネジに向かって突っ込む。
ネジは白眼を駆使して多数の分身体の攻撃を避けていく。
ネジは躱しながら離れたトモルを狙う。
そして、近付き離れたトモルに柔拳を食らわす。
トモルはまともに食らい、口から血を吐き出す。
ネジは笑みを浮かべる。
誰もが終わったと思う。
だが、攻撃を食らったトモルがポンッと音がなり煙となり消えた。
そう、実はこのトモルは分身体なのだ。
本体は・・・
（オレの考えの裏をかいて分身の一体にワザと、引かせていただだと！！）

「そもそもこっちは、玉砕覚悟で突っ込んでんだァ！！」

本体は分身体と一緒に突っ込んでいたのだ。
分身体一体と一緒に二方向から攻撃を仕掛ける。
まさに裏をかいた戦術だ。
これは決まったと思った。
だが、ネジの身体にチャクラの幕が包みこまれトモル本体と分身体の攻撃を受け止める。

「ハッ！！」

そしてそのままネジ自身の体を駒の様に円運動し、いなして弾き返した。
それを見た日向家、特にヒアシとハナビは驚いた。

「あれは、八卦掌回天か。」

「へぇ～、習得してたんだ。しかも独自に・・・だったら、アレもかな？」

ナルトとヒナタも少しは驚くが、それだけだ。
トモルは回天を食らい、吹き飛ばされた。
トモルはなんとか起き上がるが。

「これで終わりだ。お前はオレの八卦の領域内にいる。柔拳法、八卦六十四掌！」

ネジは左手足を前にだし、変わった構えをとる。
それを見て、ヒアシとハナビは驚愕する。

「八卦・・・二掌！四掌！八掌！十六掌！！三十二掌！！六十四掌！！！」

ネジは点穴を狙った連続突きを食らわす。
トモルはモロに食らい、吹き飛ばされる。
点穴を突かれ、トモルはチャクラを練れなくなる。

（さすがはヒザシの子か。だが、我が娘には届かん。ハナビはまだ幼いが必ずヒザシの子を上回る！）

トモルはなんとか立ち上がり、チャクラを練ろうとするが、点穴を突かれてるためチャクラは出ない。
そして、ネジの柔拳を食らいトモルは倒れる。
今度こそ起き上がれなくなりそのまま気を失う。

「…勝者、日向ネジ！！」

ネジの勝利で一回戦を終えた。
トモルは医療班に連れて行かれ、ネジは控室に移動する。

「では、次の組み合わせ日向ハナビとうちはサスケ。下へ！」

審判が二人を呼ぶ。
ハナビとサスケは下に降り、中央に立つ。
サスケ自身、この試合にあんまり興味無い。
こんな試合、棄権してもよかったがサスケはある目的で出ることにした。
それは、嫌がらせである。
どんな嫌がらせかというとハナビに勝たせて日向家が木の葉最強の名家だと知らしめるという嫌がらせだ。

これに気付くものはナルトとヒナタと根の者達しかいない。
「ふふふ・・・ユラムでは無いですがあなたもうちは家の者。あなたに勝てば日向家は最強だと知らしめられますね。覚悟して下さい！」
ハナビは相変わらず見下した物言いをし、サスケを挑発する。
サスケはそれに乗らず、速く試合をしてほしそうだ。
「これより第二回戦、始め！！」
ハナビは日向家の構えをとる。
サスケは後方に下がりながら印を組んでいく。
チャクラを練り上げる。
「火遁、豪火球の術！！」
サスケは豪火球を放つ。
もちろん下忍の威力バージョンで。
ハナビはおもいっきり後方に飛び躱す。
さっきまでいたハナビの場所は小さなクレーターができた。
サスケは起爆札付きクナイを数枚投げるが、ハナビは全てを躱す。
地面に突き刺さった起爆札付きクナイは爆発し、小さな穴ができる。
「接近戦を仕掛けてこないのですか？小心者ですね。臆病者には離れた場所からコソコソやるのはふさわしいです。」
ハナビはサスケを自分の領域にくる様に挑発してくる。
サスケはわざと挑発に乗り、両手にクナイを持ち構える。
左手のクナイは逆手にして。

そのままサスケは真正面から突っ込む。

「はあああ！！」

サスケは攻撃を仕掛ける。
ハナビはそれを躱していく。
サスケはまるでアクション特撮のような、ダイナミックな攻撃アクションを繰り出す。
ジャンプしながら二、三回転しながらクナイの切り付け攻撃をしたり、バック転しながらの蹴りなどの攻撃をする。
しかし、ハナビはそれらを全て躱す。
いや、全て躱せるようにサスケが下忍でも躱せる攻撃をしているだけだ。

「所詮はこの程度ですか。いくらうちはでも日向には勝てない。私の敵ではありません！」

ハナビは見下した物言いでサスケをバカにする。
サスケはどうでもよかったので無視し、連続攻撃を続ける。

「これで終わりです！」

「！・・・グフッ！」

ハナビの柔拳の掌底が決まり、サスケは口から吐血を吐く。
もっとも、サスケはチャクラでダメージを押さえ吐血する程度に止めたがハナビはおろか日向家の者たちは誰も気付かない。

「勝負ありですね。あなたごときでは私には勝てない。」

「グッ・・・ハッ・・・」
サスケはよろよろと下がる。
苦しそうな表情だ。

「分かりましたか？最強はうちはではありません。我が日向家が最強なのです。」

ハナビは勝利の美酒に酔い痴れている。

「・・・審判。ギブアップします。」

サスケはギブアップ宣言をした。

「・・勝者、日向ハナビ！！」

勝者はハナビとなった。
サスケは医務班に運ばれて行った。
ナルトとヒナタは席を外して医務室に移動する。

（この程度とはな。うちはもお終いだな。もう一人うちはがいたが我が娘にはかなわんな。そう、我ら日向家こそ木の葉最強なのだ！）

ヒアシはハナビが勝った事に優越感を得ていた。
自分達日向家の強さを世間にしらしめられたのだから。
所詮この男も愚かで節穴のマヌケだ。

サスケは医務室に運ばれ、二人の医務班がそばにいる。
その時、突然二人の医務班が眠るように倒れた。

「よっ！」

「気分はどう？」

扉からナルトとヒナタが入ってきた。
二人の医務班が倒れたのはヒナタが幻術を掛けたからだ。

「別に。それより、治療頼む。」

「分かったわ。」

ヒナタはサスケに掌仙術で治療する。
サスケの傷は治癒される。

「よっと。さて、これからどうする？試合を見るか？」

「いやだ。もぅ興味ないし。さっさと会場から出ようぜ！」

「私もナルト君と同じ。さっさと去りたい。」

「決まりだな。」

三人は医務室から出て会場から出た。

哀れな日向家（後書き）

サスケ達三人は会場から抜け出す。
そして、ついに起こる。
次回、陰謀・・・

始まる野望（前書き）

試合はまだ残っている。
ただし、それが合図になるとは知らずに。

始まる野望

サスケ達三人は会場から出て、火影岩の頂上に立っている。
もちろん、暗部服を着て。

「ふわぁ～、眠い。早くおきねえかな。ヒマでしょうがないぜ。」

「確かに眠い。もしもように本とか持ってきてなかったら散歩に出かけていたな。」

「そうね。さすがに任務じゃあ、ゆっくりできないからね。」

三人は本を読んだり雑談したりしてヒマを持て余していた。

「会場に出てどれくらい経った？」

「約一時間ってところかな。今頃会場はどうなってるかな？」

「ついさっきユラムが会場に着いたから今頃ユラムと我愛羅の試合中ってとこかな。」

「なら、そろそろだな。」

サスケの言葉にナルトとヒナタは気を引き締める。

「とりあえず、会場で何か起こったら、作戦を開始する。」

三人は会場を見る。

少し時間をさかのぼり、サスケとハナビの試合を終えたあと。
次の試合、ユラムと我愛羅の試合が始まるのだが、肝心のユラムがまだ来てないのであった。
火影はユラムの失格にしようとしたが、風影が後回しにしてほしいと頼んできた。
もちろん、理由もしっかり答えた。
答えは簡単、この会場にいる大名や忍頭はユラムと我愛羅この二人の試合を見にきたのだ。
さらに風影も我愛羅の強さを見せるためだと言ってきたので火影は後回しにすることにした。
後回しにされたので、次の試合カンクロウとシノなのだが、カンクロウは棄権すると言った。
その理由は彼の傀儡『カラス』には仕込みカラクリがあるのだ。
とある計画の前に敵に見せるのは得策ではないからだ。
もちろん、シノと審判は知るよしもない。
カンクロウが棄権したため、シノの不戦勝で終わる。
次の試合はテマリとシカマル。
テマリは巨大扇子を操り下に降りる。
シカマルは棄権しようとしたが、シノによって下に落とされた。
シノはシカマルに頑張れとエールを送るつもりで軽く背中をたたいたつもりだったが、シカマルが身に乗り出したことと思いの他たた

く威力が大きかったために下に落ちたのだ。
シカマルはやる気がない顔でテマリを見つめる。
テマリは審判の合図を待たずにシカマルに攻撃を仕掛ける。
・・・が、シカマルは間一髪で避ける。
そのままテマリは追い討ち攻撃を仕掛けるが、シカマルはそれより速く避け木の影に隠れる。
躱したあと、シカマルボ～ッとした表情で空を見上げる。
シカマルはやる気が全くないのだ。
忍になった理由も人生を楽しく生きてけそうだからだ。
テマリはそんなシカマルの表情を見て苛立ってきた。

「忍法カマイタチ！！」

テマリが扇子を振るうと真空の刃がシカマルを襲う。
風の刃は木に切り傷を作り肌や服に傷を作る。
まさにカマイタチの名にふさわしい忍術だ。
シカマルも負けじと影真似の術を繰り出しテマリを捕らえようとする。
が、テマリはバック転をしながら影に掴まらないように距離をとり逃れる。
しかし、ある程度の距離で影はピタリと止まり縮んでいく。
テマリは影が止まった場所に線を引き、影真似の術の攻撃限界距離を測る。
テマリは影真似の術の正体に気付いたのだ。
シカマルも自分の影真似の正体に気付いている。
しかし、シカマルは落ち着いており目を閉じ奇妙な印をとる。
これは、印では無くシカマルのクセのようなものだ。
シカマルがやってることは戦略を練ってるのだ。
シカマルの趣味は将棋でそれが得意だ。
将棋は元々軍師が戦略を練るのに使ってた駒がそういう遊びになっ

たとこからうまれたのだ。
つまり、シカマルはキレ者なのだ。
しかも、ただのキレ者でもずば抜けたキレ者・・・シカマルはＩＱ二百以上の超天才の頭脳の持ち主なのだ。
ちなみにこれは奈良家では珍しくもなくそのほとんどが頭がいい者が生まれるのだ。
つまりシカマルはそういう生まれの運命だったのだ。
シカマルの思考が終わり、行動を開始する時が来た。
テマリはカマイタチでシカマルに攻撃させないように攻めまくる。
シカマルも負けじとクナイを投げ動きを封じながら影真似を発動する。
テマリは慌てなかったが、あることに気付いてすぐにさらに距離をとる。
影真似のさらなる特長、それは影の名の通り少しでも光があれば影の中に影ができるのだ。
そのおかげで影はさらに距離が伸びるのだ。
そこからシカマルはあらゆる策を使う。
上着を使って影を使ってさらに距離を伸ばしたりとヒヤッとした攻撃を仕掛ける。
しかし、テマリはそれをことごとく躱す。
そして、テマリは大勝負を仕掛けようとするが突然体が動かなくなった。

「フー、ようやく影真似の術成功！」

誰もが疑問に思う。
どうやってつかまえたのか。
シカマルはテマリに後ろを見させる。
見ると、そこらへんにある小さな穴から影が通っており、テマリの背後にある穴から通った影がテマリを捕らえていた。

この小さな穴は前の試合でサスケが投げた起爆札付きクナイでできた小さな穴だ。
シカマルはそれを利用したのだ。
捕まえたあと、シカマルは突然ギブアップを宣言した。
理由は二つ、一つ目は影真似を使いすぎたためチャクラが切れかかってるのだ。
二つ目はめんどくさくなったらしく、一試合で十分なようだ。
一つ目はともかく二つ目はシカマルらしい理由だ。
テマリとシカマルの試合を終えその二、三分後にユラムとカカシが会場に到着した。

「名は？」

「うちは・・・ユラム。」

ユラムは遅刻したが、後回しにされたため失格にならなかった。
審判が我愛羅を呼ぶ。
我愛羅はゆっくり下りてきた。
ユラムと我愛羅は睨み合う。
審判が開始の合図を言うと我愛羅は砂を出し、ユラムは後方に下がる。
ユラムは先制に手裏剣を投げるが砂によって防がれ砂の盾から砂分身ができる。
ユラムは接近し砂分身を倒し我愛羅を殴ろうとするが、砂の盾に遮られる・・・直前に我愛羅の視界からユラムが消え、いつの間にか背後に回っていた。
ユラムを見た我愛羅は予選で戦ったリーと重なって見えた。
我愛羅は殴られ少し吹き飛ぶ。
これを見たガイとリーは驚く。
それはまさに重りをはずしたリーそのものだったからだ。

ユラムはさらに攻撃を仕掛ける。
砂の盾は追いつかなくなり、砂の鎧で防ぐほかすべがなくなる。
ユラムの連続攻撃が決まり、砂の鎧は剥されていく。
しかし、ユラム自信もスタミナをかなり消耗していた。
下忍であれだけのスピードを出せばそうなるは必然である。
その時、我愛羅は砂を覆い自信を隠す。
それはまさに卵の殻のようになった。
ユラムは攻撃するが、全く効かない。
それどころかカウンターされかける。
ユラムはかなり距離をとり、壁に張り付き印を組み左手にチャクラを集中する。
左手からチッチッチッ・・・と音が響き雷ができる。
その術が完成し、我愛羅に向かって突っ込む。
これはただの突き、しかし木の葉一の技師コピー忍者カカシのオリジナル技。
その名は・・・

「千鳥!!!」

千鳥が決まり、砂の殻を貫いた。
ちなみに、サスケは千鳥から形態変化まで出来るのですでにカカシより千鳥を使いこなしている。
我愛羅の絶対防御を貫いたため、カンクロウとテマリに担当上忍は驚愕している。

「うわああ!!血がぁ・・・オレの血がぁ!!」

すると、砂の殻の中から我愛羅の悲鳴が聞こえた。
ユラムは何かに掴まれる感覚を感じ、引き抜く。
引き抜くとそれは異形の腕が出てきた。

異形の腕は殻の中に戻る。
ユラムは空いた穴から中を覗く。
ユラムの目に何かの目に睨まれ寒気を覚える。
砂の殻は割れ砂に戻る。
そこには左肩に傷が付き、血が流れている我愛羅の姿が。
すると、ユラムと我愛羅の周りに無数の白い羽根が舞う。
それを見た観客席の者達は眠ってしまった。
これは幻術である。
それに気付いた木の葉の上忍と暗部は幻術返しをし、幻術を解く。
その時、火影と風影がいる所に煙がたちこめる。
そして、里の外では巨大な大蛇と多数の音忍と砂忍が里に攻め込んできた。

「始まったな・・・」

サスケの声が合図となった。
木の葉崩しの始まりだ。

始まる野望（後書き）

ついに木の葉崩しが始まる。
しかし、サスケ達は表に出ない。
次回、木の葉崩し・・・

影で動く者達（前書き）

木の葉崩し起動。
戦は始まった。

影で動く者達

サスケ達三人は正門から大蛇が現れるのを目撃していた。

「どうやら始まったようだな。これより作戦を始める。」

「ああ。一尾の人柱力我愛羅はどうするんだ？」

「放置だ。もし人柱力が出てきたらナルト、お前に任せる。ただし、殺すなよ。殺したら一尾が出てきて面倒いからな。」

「分かった。」

「それじゃ、改めて作戦内容を教えて？」

「わかった。俺達の任務は侵攻してくる音忍と砂忍を始末すること。他の木の葉の奴等に気付かれないように行動すること。正門を俺が、右の方をヒナタが、左はナルトが対処してくれ。ただし、さっきも言ったがナルトは一尾が出たらそっちにまわってくれ。」

「「了解。」」

三人は変化をし、面を被る。

「よし、任務開始！」

三人は戦場に跳ぶ。

正門では大蛇の他、音と砂が入ってきて侵攻を開始していた。
そんな中、サスケは人に見られないように敵を仕留めていく。
誰にも見られないように移動しながら音も経てずに敵の命を絶っていく。

「こんなもんか。大したことないな。」

そう言いながらサスケは刀を振るい、クナイや手裏剣を投げ敵を殺っていく。
まさに暗部として動くサスケであった。

左の方ではナルトが敵を蹴散らしていく。
大刀で敵を切り裂いていく。
気付かれないように戦うためチェーンソーのようにできない上、ゆっくりもできない。
しかし、ナルトはお構いなく敵を絶命させる。

「チッ、ゆっくり殺れないからつまらないぜ。一尾の人柱力に会いに行って戦ってこようかな。」

そんなことを考えながらナルトは別の場所に移動を開始する。

右ではヒナタが鉈で敵のスプラッタを公開させる。
脳天からかち割ったり、脇腹を抉り血飛沫が吹き出、肩から突き刺されたりと敵は残忍に殺されていく。
ヒナタは無表情で敵と対決し、全てを一撃で仕留めていく。

「チームワークがなってませんね。それでは殺して下さいといった感じね。」

ヒナタは迫ってくる相手に迎撃しまた命を奪っていく。

サスケは何十何人かの命を奪った時、ナルトから心念の術を使って頭から声が聞こえてきた。

（サスケ！ヒナタ！）

（なんだ？）

（どうしたの？）

（悪い。これから一尾の人柱力のところに行ってくる！）

（・・・なにがあった）

（どうやら一尾が出はじめてるようだ。このままだと一尾が出てくるかもしれない）

（確かにやばいな・・・別に一尾が出て木の葉を襲うと関係ないが、後のことを考えるとそれはよろしくないな。わかった、一尾のほうはお前に任せる。動けなくしてやれ。ただし、殺すなよ。殺したら一尾が出るからな）

（わかってるぜ！任せな！）

（気をつけてね）

（ああ、ヒナタもな）

ナルトが我愛羅のほうに跳んで高速移動する。
サスケとヒナタは多少の心配をしながらナルトのほうに顔を向ける。
その間にサスケとヒナタの方でも戦いに変化が訪れた。
よくみると暗部や旧家の忍達が敵をたくさん蹴散らして活躍している。
そのおかげで敵の数はかなり減っており壊滅も時間の問題となっていった。

（どうやらここまでだな。・・・ヒナタ、聞こえるか。・・・）

（聞こえています）

（任務は終わりだ。この場から去るぞ）

（了解。私はナルト君のところにいくわ）

（・・・わかった。好きにしな）

サスケはその場を素早く去る。
ヒナタはナルトのあとを追いに行った。

その頃、会場にいた我愛羅とユラムは会場を出て離れた森で再選していた。
しかし、我愛羅は一尾の力を解放しかけて身体の一部が一尾・・・いや、守鶴と化した。
そのおかげでリー以上のスピードと人外級の破壊力でユラムに襲いかかる。
ユラムは抵抗するが、力の差と呪印により瀕死近くまで追い詰められる。
その時、トモルとサクラが現れる。
トモルが何故いるのかというと、柔拳と点穴を食らっていたが医務班のおかげで全快とはいかないがかなり回復した。
そのおかげでユラムの援護に向かえたのだ。
しかし、姿がかなり変わった我愛羅を見て恐怖し、足がすくんだがサクラの無謀ながらの抵抗とユラムの自己犠牲を見て恐怖は消え守るという強い気持ちが出てきた。
ユラムはその大きなチャクラ量を駆使した大量の影分身をだし数の暴力を仕掛ける。
我愛羅は追い詰められ、とうとう完全体になり巨大な狸となった。

それをぼーぜんと見上げるトモルとユラム。
そんなトモルに我愛羅は砂漠柩を掛ける。
砂に埋もれ、トモルは絶対絶命のピンチになる。・・・が。

「うおらああ！！」

雄叫びとともに我愛羅は突然頭に衝撃がきて前のめりに倒れる。
黒い影が我愛羅の頭に攻撃したようだ。
黒い影がトモルの隣りに立つ。
トモルはビクッとしながら恐る恐る影を見る。
それは・・・

「・・・」

「だ、誰だァ！？」

「暗部じゃと？」

「狐の面？」

それは狐の面を被った暗部・・・そう、ナルトだ。
ナルトは高速で印を結ぶ。

「涅槃精舎の術。」

ナルトはカブトが掛けた幻術をトモル達に掛ける。
トモル達は幻術返しをすることもできず、幻術に掛かり眠る。

「幻術は苦手だが、まあこいつらには十分だな。あとで記憶も変えないとな。」

ナルトは幻術を掛けれて安堵する。
ナルトは我愛羅を見る。
「誰だ・・・貴様は？」
「・・・俺は貴様と同じ化け物を飼ってる者だ。」
「なに？」
今ここに、一尾の人柱力と九尾の人柱力との戦いが始まる。

影で動く者達（後書き）

人柱力同士の戦い。
しかし、圧倒的実力差が我愛羅を襲う。
次回、人柱力としての差・・・

人柱力としての力・・・そして木の葉崩し終結（前書き）

一尾の人柱力我愛羅・・・九尾の人柱力ナルト。
人外の力を持つ者同士の戦いが今始まる。

人柱力としての力・・・そして木の葉崩し終結

「俺と同じだと・・・？」

我愛羅はナルトの言葉に疑惑を持つ。
突然自分と同じ存在だと言われれば誰だって驚き、疑惑やびっくりする。

「まあ、信じる信じないはそっちの勝手だがな。が、今はそんなことじゃない。俺がすべき事はたった一つ、てめえをぶちのめす！それだけだ。」

「ぶちのめすだと？クックックッ・・・貴様ごときにか？俺をぶちのめすだと？」

我愛羅はナルトの台詞にバカにしたように嘲る。

「同じ人柱力として貴様のその姿と実力は見るに堪えん。はっきり言って我慢の限界だ。てめえをぶっ殺してやりたいが、殺したら面倒ごとが起こるから動けなくなるまでボコボコにしてやる。」

ナルトは自らの本心を我愛羅にぶつける。
ナルトにとって我愛羅は人柱力として同じ尾獣持ちとして情けないとしか言い様がない。

ナルトは九尾を制御できてるに対して我愛羅は一尾を制御できてない。
恥ずかしすぎて仕方ないのだ。
「ほざけぇぇ！！」
我愛羅は砂漠柩を掛けるがナルトは素早く躱し懐に入る。
「大玉螺旋丸！！」
ナルトは我愛羅の腹に大玉螺旋丸をぶつける。
モロに食らい我愛羅はおもいっきり吹っ飛ぶ。
「ぐぅぅぅっ！きさまァァ！」
「その図体は飾りか？俺はここにいるぜ？」
ナルトは我愛羅の前方にある木のてっぺんに立っている。
「うおおお！」
我愛羅は右腕でナルトを捕まえようとする。
「だから遅いって言ってるだろ！」
「ごああっ！」
ナルトは瞬身の術で躱し素早く背後に現れ背中をチャクラで込めた蹴りを食らわせ蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされ前のめりに倒れ数m滑る。
ナルトは近くの木のてっぺんに着地する。

「この程度かよ。こんなんじゃ九尾の力を使う必要は無いかな。」

ナルトは小さな声で独り言を言う。

「・・・クッ、クックックックッ・・・ハーッハッハッハッハッハッ！！」

我愛羅はその巨体をゆっくり起き上がり、突然おもいっきり高笑いをあげた。
いきなりの高笑いにナルトは引いた。

「なに笑ってやがる。」

「これだ！この痛み！この感覚！さっきのうちはや分身野郎とは桁違いの痛み・・・これだ・・・この感覚・・・きさまは強い！きさまのような強い奴を殺せばより強い、強い生を実感できる！」

「・・・」

「うおおお！！砂時雨！！！」

無数の砂の弾丸がナルトを襲うが、跳んで軽く躱す。

「風遁・風塵裂破！！」

ナルトは背後から風遁の術を放つ。
強烈な突風と幾つもの風の刃が我愛羅の身体に直撃する。

吹き飛ばされ、切り裂かれた傷が幾つもできる。

「ば、バカな…あの完全体の我愛羅にあれだけの傷を！！？そんな…奴は何者なんだ！？」

離れた場所で見ていたテマリはナルトの強さを見て驚愕し、恐れる。

「ヒャハハハ！！面白い…面白いぞォォォ！！！」

完全体の守鶴の額から人柱力の我愛羅の上半身が現れた。

（や、やばい…我愛羅の奴やるつもりだ！とにかくここから逃げないと！）

テマリはそれを見て恐怖し、この場から急いで離れる。

「ここまで楽しませてくれた礼だ。砂の化身の…本当の力を見せてやる！」

我愛羅は印を結びチャクラを練る。

「狸寝入りの術！！」

術名を言い、我愛羅は眠り代わりに一尾守鶴が目覚めた。

「シャハハハハハアァッ！！やっと出て来られたぜェェ！！」

「アレが一尾守鶴かよ。なんつうか陽気な奴だな。」

「ん？！ひゃっはぁ～～！いきなりぶち殺したい奴、発け～～～～ん！！」

一尾守鶴はナルトを見つけ殺す宣言をする。

「風遁…練空弾！！」

一尾守鶴は左腕で自身の腹を叩き、口から真空の塊を吐き出す。
ナルトは跳んで躱す。

「へぇ～、一応は尾獣の一体の一尾だな。かなりの攻撃だな。」

「練空弾！！」

一尾守鶴は跳んだナルトに目掛けて練空弾を五連発、発射する。
ナルトは四発までは躱すが、最後の一発は躱せなかった。

「チィッ！」

防御もできず、直撃し爆発する。

「キィエーイ！やりィーー！殺したァ！殺したァー！！」

一尾守鶴は、めんどくさいから守鶴にします。
とにかく、守鶴は高笑いを上げ気分がよかった。

「誰を殺したって？」

その時、右側から声が聞こえ顔を向けるとそこに無傷のナルトが木のてっぺんに立っていた。

「貴様～！どうやって躱した！当たっただろ！」

「変わり身の術だ。こんな単純で基本な術にすら気付かなかったのか。」

ナルトは当たる直前に丸太に変わり身をしていたのだ。

「それにしても、これで同じ尾獣かよ。はっきり言ってがっかりだ。」

「なんだと！？」

「はっきり言って貴様のその姿は同じ尾獣持ちとして見るに堪えん！俺が本当の人柱力としての力を魅せてやる！いくぜ、力を借りるぜ九尾！」

そう言うと、ナルトの身体から赤いチャクラが溢れ出す。
赤いチャクラが具現化し、チャクラの尻尾が出てきた。
九尾のチャクラが出たのだ。

「覚悟はいいな。」

「！！？」

守鶴の目からナルトが消えた。

「ごがあああっ！」

守鶴の腹に激痛と衝撃がきて、おもいっきり飛ばされる。
ナルトが一瞬で守鶴の腹に入り蹴りをいれたのだ。

「てめー！練空弾！！」

「…がああっ！！」

「んなにィー！」

守鶴は練空弾を放つが、ナルトはチャクラの衝撃波でかき消した。

「うおおああ！！！」

「ぎがあああっ！」

驚いている守鶴に高速移動しながらチャクラの爪で引き裂いていく。守鶴の身体は爪によって引き裂かれた傷がたくさんできる。

「が、がああ…くそったれェ……」

「どうしたよ。もうグロッキーか？結局は見掛けの図体か。九尾も嘆いてるぜ！」

『嘆いてるものかァ！あんな狸と儂を同じにするなァ！所詮は力の差も知らぬ脳筋狸だァ！』

ナルトの言葉に体内にいる九尾が怒る。

九尾の声が聞こえるのはナルトのみ。

「さて、そろそろ一尾の人柱力を叩き起こしてやるか！」

「ふざけるなァーー！！！」

守鶴は右腕を振るいナルトがいた木々をなぎ払う。

「そらーっ！起きやがれ！」

ナルトはあっさり躱し、我愛羅の左頬を殴る。

「グゥゥッ…チクショウがァァ！出てきたばっかりなのにょォ！！こいつをぶっ殺してねえのにィィィ！！！」

術が解け守鶴が眠る。

我愛羅は目を覚まし、ナルトを睨み付ける。

（よくも…よくも俺の術をぉぉ！！）

ナルトは守鶴の額に乗り、その場から上空に跳ぶ、

我愛羅はナルトを追うように上空を見、怒りに染まる。

「死ねェー！！」

我愛羅は砂でナルトを捕らえようとするが、チャクラの気合い砲で砂を弾き吹き飛ばす。

そのままナルトは我愛羅に目掛けて落下していく。

「螺旋丸！！！」

急降下しながらナルトは我愛羅に螺旋丸を食らわす。

「ぐぉぉおおおっ！！」

モロに食らい守鶴にヒビが割れ崩れていく。

我愛羅は吹き飛び、地面にたたき付けられる。

仰向けに倒れ、チャクラも使い果たし我愛羅は動けなくなった。
そんな我愛羅の横にナルトは軽やかに着地する。

「ふぅ～。」

ナルトは首や肩をゆっくり回しながら我愛羅を見つめる。

（こ、殺される・・・）

「く、くるなぁっ！」

「いかねえよ。お前を殺すと面倒な事が起こるからな。さて、気分はどうだ？」

「なに・・・？」

「同じ化け物持ちでもこれほどの差があったんだ。さぞ悔しいだろ？所詮貴様はこの程度なんだよ。」

「な、なんだと！？」

ナルトは我愛羅に挑発するような蔑むような口調で話しかける。

「てめえは守鶴を使いこなしてはいない。ただそれに振り回されてるだけだ。そんな貴様を屠っても仕方がないんだよ。はっきり言って貴様は弱い・・・弱すぎる。」

「きさまァァ！」

「せめてその守鶴をコントロールできるくらいは強くなってからかかってこい。」

「ぐっっ！」

ナルトはそう言い我愛羅を見下す。
我愛羅はナルトを殺気を放ちながら睨み付ける。

「じゃあな。もう二度と会うことはないだろうがな。」

「待て・・・」

「あ？」

「貴様の名は・・・」

「・・・本来は名乗らないんだがな。暗部名は金狐・・・本名はうすまきナルト。」

「うすまき・・・ナルト・・・・覚えておく・・・！次に会った時は必ず貴様を殺す！待っていろ！」

ナルトはそれを聞き、トモル達が眠っている場所まで移動する。
そのすぐあと我愛羅のそばにテマリとカンクロウが現れ連れ帰った。
ナルトはトモル達のそばに着地し、その近くにヒナタもいた。

「お疲れ様。結界が張ってるおかげでここの事はばれてないわ。」

「結界と幻術は苦手だからな。上手くいってよかったぜ。」

「ふふ・・・彼等の記憶改ざんは任せてね。私がやるから。」

「頼むな。」

「ええ。」

ヒナタはトモルとユラムさらに忍犬のパックンに記憶改ざんする術を掛け、ナルトの事を忘れさせた。
それを終え、ナルトとヒナタは結界を解きこの場から去った。

ナルトと我愛羅との戦いが終わって数分後、木の葉崩しはここに終結した。
木の葉崩しは失敗に終わった。
その代償は決して高くなかった。
火影の死の他に大勢の死者と負傷者を出して。

人柱力としての力・・・そして木の葉崩し終結（後書き）

木の葉崩しはここに終わる。
だが、新たな始まりはすでに動いている。
次回、帰ってきた者・・・

戻ってきた者（前書き）

木の葉崩しが終わった。
しかし、それは新たな戦いの前触れ・・・

戻ってきた者

木の葉崩しから二日が経った。
この日は雨が降っており、まるで死んだ人々を悲しんでるかのように。
そう、今日は火影の死を黙祷する日だ。
誰もが出ており火影の死に誰もが悲しむ。
否・・・数人は悲しんでいなかった。

それから数日が経った。
誰もが里の復興に勤しんでる中、サスケはダンゾウと会っていた。
「火影は死に、これでアンタが火影になる時がきたな。」
「・・・いや、儂はまだ火影にはならん。」
「どういう事だ？」
サスケは疑問に思う。
今の里の状況はガタガタでトップがいない。

したがい誰かが火影にならなければならない。
現状ではダンゾウが火影にふさわしいはずだ。
「儂は根のトップだ。それにさきの戦があったとはいえこの里は平和ぼけしておる。儂のような武闘派は必要無いようじゃ。」
「なるほどな。しかし、そうなると誰が火影になるんだ？現状で考えると自来也か？」
「いや、あやつは断り代わりに綱手が選ばれた。」
「綱手？確か伝説の三忍の紅一点で医療忍術のスペシャリストだったな。」
綱手には二つ名があり口寄せでナメクジを呼ぶためナメクジ姫とも呼ばれ、賭け事にめっぽう弱いため伝説のカモとも呼ばれている。
「しかも、あの女はあの初代火影様の孫娘だ。火影の器にふさわしいのさ。」
「なるほど。しかし、そう簡単に見つかるのか？聞けば転々と各地を逃げ回ってるって話しだ。大丈夫なのか？」
「心配はいらん。情報によれば綱手はそんなにこの里の近くの町におるらしい。」
「なら、大丈夫か。まあ俺には関係無いな。俺達の存在がばれなきゃ誰が火影になろうが知った事ではない。」
「フン・・・」

サスケにとって誰が火影だろうと自分達の目的の前には関係無いのだ。

「さてと、俺はそろそろ帰るぞ。いつまでもこんなところには居たくないからな。」

サスケはこの場から去ろうとする。

「ダンゾウ様。」

すると、一人の暗部がダンゾウの前に現れ跪く。

「なんだ?」

「ハッ、正体不明の者が二人我が里に潜入したもよう。」

「正体不明だと?身元は判明されてらんのか。」

「はい。申し訳ありません。」

(正体不明二人・・・まさか)

サスケはなにかに気付いた。

「ダンゾウ、俺が見て来よう。興味がある。」

「・・・珍しいな。貴様が興味をもつとはな。」

「たまにはな。」

「よかろう。好きにせい。ただし、誰がきたのか教えるのだ。よいな？」

「・・・わかった。」

サスケは瞬身でこの場から去った。

その頃、里の川が流れるとある道でカカシ、アスマ、夕日紅の上忍三人が里に不法侵入した二人と対決していた。

一人は干柿鬼鮫・・・鮫のような顔と巨体、そして手にもつ霧隠れのみが持つといわれる大刀鮫肌を持つ“霧隠れの怪人”またの名を“尾無しの尾獣”とも言われる忍。

そしてもう一人は、サスケの兄イタチだった。

二人はある組織に入り、ある目的の為に木の葉の里に潜入してきたのだ。

現状はカカシがイタチの幻術月読を食らい意識を失う寸前でアスマと紅はカカシの指示で目を閉じている。

「ほう・・・あの術を食らって精神崩壊を起こさぬとは・・・・しかしイタチさん。その眼を使い過ぎるのはアナタにとっても危険。」

「問題無い。」

「ぐっ・・・・探しもの・・・とはうちはサスケの事か。」

「いや・・・オレの探してるものは・・・！」

「！」

イタチと鬼鮫は背後にいる存在に気付きすぐさま振り向く。
そこには鬼の面を被った暗部・・サスケが手すりの上に立っていた。
ついに、サスケとイタチの兄弟対決が幕をあげる。

戻ってきた者（後書き）

サスケ対イタチ。
兄弟の再会は戦いに変わる。
次回、情報交換・・・

うちはイタチ

ＣＶ・・石川英郎

性格・・原作とほぼ同じ

容姿・・原作と同じ

備考・・うちはサスケの兄で暁のメンバーの一人。六年前のうちは滅亡事件の実行者。里の平和を第一に考え幼き頃に戦争を直に感じた為戦争や争いを嫌う。サスケはもちろんナルトとヒナタと仲がよい。実力は暁でもトップクラス。忍術は火遁。写輪眼の最高の使い手。

再会せし兄弟（前書き）

ついに再会したサスケとイタチ。
それは、偶然か必然か・・・

再会せし兄弟

イタチと鬼鮫は暗部のサスケを睨む。

「鬼の面・・・なるほど、アナタが鬼の暗部ですか。」

「・・・・・」

（鬼の暗部・・・何故ここに？）

（やはり兄貴か。忘れるところだったな。原作の知識が重要なところ以外は薄れてるからな）

サスケはイタチをじっと見つめる。

「アナタが相手になるのですか？クックックッ・・・削りがいがありますねぇ！」

鬼鮫は鮫肌をサスケに向けて構える。
サスケはクナイ二つを取り出し鬼鮫に向けて投げる。
二つのクナイを鬼鮫は鮫肌を盾にして防ぐ。
その間にサスケは鬼鮫の目の前に現れ刀を振るうが、それを横に跳び避ける。

「やりますねぇ・・・顔面に向かってクナイを投げ私が鮫肌で防ぐようにし視界を封じる。その間にアナタは懐に入り攻撃するですか。しかし、背後に周り攻撃すればよかったのに何故ですか？」

「さっき背後をとらなかったのは読まれると思ったからだろう。そうでなくては正面から攻撃なんて事はしないはずだ。」

（さすがは兄貴だな。よく読んでる。背後をとれば下ろした鮫肌で防がれるのは予想済み。だから正面から攻撃したんだ。兄貴から離れさせるためにな）

鬼鮫の疑問をイタチが読み、サスケはそれを心中で肯定する。
サスケはある事をする為にイタチと鬼鮫を離れさせたのだ。

「それにしてもその刀・・・なかなか業物ですね。私の鮫肌とどっちが強力ですかね！」

サスケと鬼鮫がともに駆ける。
二人の武器がぶつかり、周りに飛沫が上がり水で二人が見えなくなる。
水が落下した瞬間サスケは二人になり、本体はイタチに向かって分身体は鬼鮫と鍔競り合いをしている。

「影分身か。」

「・・・」

本体とイタチはクナイを構えぶつけ会う。
分身体と鬼鮫は一度距離を取り、鬼鮫は印を組む。
サスケも素早く印を組む。

「水遁、水槍撃！！」

（水遁、水陣壁！）

水の槍がサスケを襲うが水の壁がそれを防ぐ。

（やるな。だが・・・甘い）

「！？むおおっ！」

鬼鮫は下からなにかくることに気付きバック転で躱す。

水の中から現れたのは水の龍だった。

「水龍弾ですか。あの一瞬で術を発動するとはなかなかやりますね。」

（今のを躱すとはな。さすがは暁の一員か・・一筋縄ではいかないな）

その頃サスケとイタチはクナイ同士で結び互いの顔を近付ける。

イタチは自身の目で面の中の目に気付く。

（あの目、まさか・・・）

その瞬間、二人は精神世界にきていた。

サスケが月読を発動したのだ。

「・・・まさかお前が鬼の暗部だったとはな・・・サスケ。」

「・・・・久し振りだな、兄貴。」

サスケは面を外し、素顔を晒す。

二人は久し振りの兄弟の再会に笑みを浮かべる。

「お前が来るなんてな。今、お前達はどうしてるんだ？」

「・・・兄貴が里を去ったあと、俺とナルトとヒナタはダンゾウの所属の暗部になった。そしてナルトとヒナタは表では死んだ事になった。」

「なるほど、六年前のナルトとヒナタが突然死んだという情報を聞いた時は驚いたがそういう事か。納得した。」

「・・兄貴はあれからどうしてるんだ？」

「俺はあのあと暁という小組織に入った。この組織にはS級犯罪者が俺の他に九人ほどいる。」

サスケとイタチは互いに情報交換をし、特に今までなにをしていたのかを話し合う。

「なるほど・・・それで兄貴、ここにきたのはいったい何の用でだ？なんか任務があってきたんだろう？」

「ああ・・・実は、ナルトを探していてな。」

「ナルトを？・・・・九尾か。」

「鋭いな。その通りだ。ナルトを暁に連れて行く事なんだが、俺自

身は別に連れて行く気はないし友をさらう気はない。」

イタチは暁に属するにあるまじき事を喋る。
イタチにとって暁はどうでもよく、サスケ達が無事だと知ればもう指令は達っせれたのだ。

「ナルトはヒナタと一緒に里から離れた森の一軒家にいる。そこにいるはずだ。」

「・・・よいのか？」

「構わんさ。実際に会ってれば報告を誤魔化すのも容易いだろう？」

「確かにな。すまないな、不甲斐ない兄で。」

「いや、俺にとっては最高の兄貴だ。」

二人は笑う。

「また会おうサスケ。」

「ああ。次に会う時は敵同士かもしれないけど、俺は兄貴と戦わない。それだけだ。」

「俺もお前やナルト、ヒナタとは戦わない。約束する。」

その瞬間、精神空間は砕けた。
二人は精神世界から抜けた瞬間互いに距離を取る。
ちなみに月読は例え精神世界では何時間、何日だろうと現実ではほんの一瞬に過ぎない。

二人の会話は二人にしかわからない。
サスケとイタチは見つめあう。

「イタチィィ！！」

イタチの後方から突然叫び声が聞こえてきた。
イタチは背後を振り向くと、そこにユラムが殺気を出しながらイタチを睨み付けていた。

「ようやく会えたぞうちはイタチ！やっと・・やっと貴様を殺せる！俺は、貴様を殺す為に生きてきた！」

ユラムは左手に千鳥を発動しながら水の上に立つ。

（まだ水の上に立つ技術を身につけてないはずなんだがな。なるほど写輪眼でか。不完全だがこれくらいはコピーできるか）

サスケはなんも感慨も感じずにユラムを見る。

「ほぉ、写輪眼ですか。うちは一族はアナタ自身とアナタの弟以外は全滅したと聞きましたが。誰ですか？」

「・・・だれだ？貴様は。」

「な！？なん、だと・・・」

イタチはユラムが誰なのか分からなかった。
かなりマジである。

「貴様ぁぁ、俺をしらんだと・・・ふざけてんのか！」

「いや、全く知らないんだがな。貴様がうちは一族だていうことはわかるのだがな。」

イタチにとってうちは一族はもはや過去のものであり、あの事件の細かいところまではいちいち覚えてはいない。

「ふざけるなぁ・・・ふざけるなあっ！！」

ユラムは完全に頭に血が上り怒りが爆発した。
ユラムの頭の中はイタチを殺す事だけしかない。

「俺はイタチ、貴様を殺すために今日まで生き抜いてきた！その貴様が俺の事をしらんだと！？許さん・・・貴様は・・・うちはイタチ、貴様は殺す！！うおおお！！！」

ユラムはイタチに突っ込み千鳥をくらわそうとする。

「・・・」

「な！・・・なん・・だと！？」

が、イタチはあっさりユラムの左手を掴み千鳥を躱す。
そこからイタチの一方的な攻撃が開始された。
腹に拳を叩き込み肘打ちで頭を叩き下ろし膝蹴りで顎を蹴り上げ掌底で顔面を抉り、連続攻撃が決まる。
ユラムは何もできぬままなすがままに食らいまくり悲鳴をあげる。

「ユラム！」

アスマと紅はすぐにでも援護に向かいたいが目を瞑ったままで何もできない。
カカシは月読を食らい意識が朦朧としているので今にも気を失いそうだ。
サスケは助ける気がないため見てるだけ。
イタチはユラムの首を右手で掴み持ち上げる。
すでにユラムはボロボロ状態だ。
イタチは追い討ちに月読を掛ける。

「ぐあぁぁぁあああ・・・！！」

ユラムの甲高い悲鳴が木霊する。

「イタチさん。そう何度も使わないほうがいいですよ。」

鬼鮫はイタチの心配をする。
鬼鮫はイタチの心配をしながらも分身体のサスケと剣劇をしている。

（分身体とはいえこの暗部は強いですね。このままだとキツいですね。ならば、ここは何もできない彼等を狙いますか！）

鬼鮫はカカシ達をチラリと見て、彼等を利用使用と考える。

「オラアッ！！」

「！」
（なんてバカ力だ。はじきとばされた）

分身体は刀で防御したが少しとばされる。
その間に鬼鮫はカカシ達を狙いつけ走る。

「悪いですが、先にアナタ方から片付けさせてもらいます！」

「「「！！」」」

鬼鮫はカカシ達に鮫肌を振るおうとする。

「木の葉剛力旋風！！」

「！！」

（なっ、何ィ！！）

何者かが、鬼鮫を蹴り飛ばした。

分身体の横を通りすぎる。

イタチと本体のサスケも気付き振り返る。

「何者です？」

「木の葉の気高き碧い猛獣・・・マイト・ガイ！！」

「・・・・なんて恰好だ。珍獣の間違いでは？」

「あの人を甘く見るな。」

いつの間にかイタチが鬼鮫の隣りに立つ。

ユラムは手から離れて川に沈んでいく。

（やはりイタチ・・・）

「ぐっ・・・・」

限界だったのか、カカシは気を失い倒れ沈みはじめる。
ガイは急いでカカシを助け肩に担ぐ。

「カカシ！」
（カカシをここまで・・・）

「イタチと目を合わせるなガイ！！術にかけられるぞ！！」

アスマがガイに忠告する。

「そんなものはこっちとて分ってる！カカシとの対戦対策に写輪眼に対する戦い方も考慮してる。二人とも目を開けろ！！」

突然の目を開けていい宣言を聞き、アスマと紅は戸惑う。

「写輪眼と闘う場合は目と目を合わせなければ問題ない！常に相手の足だけを見て、動きを洞察し対処するんだ。」

「確かにそう言われればそうかも知れないけど・・・」

「そんな事が出来んのはァ、お前だけだぞ。」

そう言いながら二人は目を開ける。

「まぁな。足だけで相手の動き全て把握するにはコツがいる。だがこの急場にそんな事も言ってられん。ともかく今すぐに慣れろ！！」

イタチと鬼鮫はジッとしながら三人とサスケと分身体を見る。
三人も会話しながらも油断なくイタチと鬼鮫の足元を見る。

「どうする？」

「紅！お前はカカシを医療班の所へ！！アスマはオレの援護だ。」

ガイは紅にカカシを預ける。

「後はオレが手配した暗部の増援部隊が来るまで、少しの間相手してやる！！そっちの暗部もいいな？」

「・・・」

サスケはうなずき、クナイを逆手に持ち替えて構える。

「いい度胸ですねェ……」

「鬼鮫、止めだ。」

誰もが今にも飛び出しそうな雰囲気なのにイタチが突然の止め宣言を言う。

「オレ達は戦争をしに来たんじゃない。残念だがこれ以上はナンセンスだ。帰るぞ。」

「……せっかく…ウズいてきたのに仕方ないですねェ。」

「「「「…」」」」

イタチと鬼鮫はこの場から立ち去った。

とりあえず現状は助かったのだ。

「助かった…のか？」

「そのようね。」

「ふぅ…おっと！そういえばユラムの事を忘れていた！ユラム！」

ガイ達はユラムが沈んだであろう場所を見る。
見ると、サスケがいつの間にかユラムを引き上げていた。
サスケはユラムをガイに投げ渡す。

「おっと！」

ガイはしっかりキャッチしておんぶする。
その間に分身体は刀をサスケに投げ渡し、分身体は消える。
サスケは刀をしっかり掴み鞘に戻す。
そのままサスケは立ち去ろうとする。

「待て！お前は鬼の暗部だな？もしよかったらオレ達と一緒に…！！」

ガイが行こうと言おうとした瞬間、サスケが三人を睨みつける。
サスケの睨みに三人は身を固くする。
しばらく睨み付けたあと、サスケはこの場を去った。
残った三人が動いたのはサスケが去って二分後だった。

再会せし兄弟（後書き）

サスケは去り、ナルト達のいる場所へ。
イタチと鬼鮫もナルトのいる場所へ。
次回、一時の再会・・・

邂逅（前書き）

久し振りに四人が集う。
一人オマケがいるが・・・

遡逆

イタチと鬼鮫はサスケに言われた森の方に移動していた。

「しかし、本当にこの先にいるんですかね？」

「いるのは間違いない。いってみればわかる事だ。」

鬼鮫は疑問に思いながらもイタチの言う事を信じて森を駆ける。

その頃、サスケは暗部服を脱ぎ面を外しいつもの姿に戻りイタチ達の後を追う。

「あの程度の睨みに動けなくなるなど、上忍のくせにふぬけ過ぎだ。」

サスケはガイ達のふぬけっぷりにあきれ果てていた。

「まあどうでもいいか。今は兄貴の後を追わないとな。兄貴はともかくあの鮫顔は必ず仕掛けるだろうな。」

サスケは速度を上げて森を駆け出した。

イタチと鬼鮫はナルトを見つける。

「いた。」

「アレですか。生きていたのですね。しかも彼女ご同伴とはやりますね。」

ナルトはヒナタと一緒に暗部用の一軒家の近くで鍛練をしていた。

「あれは日向ヒナタ。やはり生きていたか。」

「日向ヒナタといえば六年前に死んだはずではなかったのですか？」

「・・・それは本人の口から聞いたほうがいいだろう。いくぞ。」

「はい。」

ナルトとヒナタは体術の応酬を繰り広げていた。

たまに鍛練をしとかないと怠けてしまうため休みの日は一時間だけでもしとくのだ。

「・・・どうした？」

「誰かに見られてる。」

「！誰なんだ？」

「気配は二つ。」

ヒナタは白眼で二人の存在に気付いた。
ナルトとヒナタは気配がする方向に向き構える。

「出てこい！そこにいるのはわかってんだよ！」

「出てこないのならこっちからいきますよ！」

ナルトとヒナタが出てくるよう促すと、イタチと鬼鮫が木の枝から飛び降り二人の前に現れる。

「気付いてましたか。さすがは日向一族、厄介ですね。それに強い・・・さっきまで戦ってた上忍より強いですね。」

「久し振りだな。ナルト、ヒナタ。」

「お久し振りですイタチさん。」

「まさかイタチだったとはな。まさかこうして会うなんてな。そっちの鮫顔は誰なんだ？」

「おや？イタチさん、九尾のと日向一族の娘さんとお知り合いだったのですか？それにしても、鮫顔とは酷いですね。これでも結構気にしているのですよ。」

鬼鮫はイタチがナルトとヒナタと知り合いだという事に驚く。
ナルトに言われた事を以外に気にしてるようだ。
鬼鮫は自分が色ものだとわかっているため少し落ち込む。
ちょうどその時、イタチと鬼鮫の背後に気配を感じ振り向く。
「・・・久し振りだな兄貴。」

「久し振りだな。」

「これはこれは・・・今日はよくうちは一族に会いますね。もしかして、彼は。」

「・・・俺の弟だ。」

追いついたサスケがイタチと鬼鮫の背後に立った。

「帰ってきた・・・わけではないよな。なにしにきたんだ?」

「・・・ナルトを連れてくるよう命令された。」

「イタチさん。よろしいのですか?喋って。」

「構わんさ。誤魔化すのは無理だろう。それに知ったとしても三人はなにもしないだろう。」

「ああ。どんな組織に入ったんだ?」

「暁だ。」

「あかつきィ?」

「聞いた事ない組織名ですね。」

ナルトとヒナタは聞いた事ない組織名に気になった。

「俺を含む九人に属する小組織だ。俺達は尾獣を捕らえる事に指令をもらい、ナルトを捕らえにきた。」

「ふ～ん。で、やるのか？」

「ナルト君は渡しません。もし、力ずくだというなら・・容赦しません！」

「・・・どうしますか？一戦やりますか？」

ナルトとヒナタと鬼鮫はすでに臨戦体制をとる。
サスケとイタチは互いを見つめ合い思案する。

「・・止めだ。オレ達二人では三人に勝つのは難しい。それに生きていたというだけでも儲け物だ。十分だ。」

「・・・そうですね。まだ連れていく必要は無いですね。」

「・・・懸命な判断に感謝する。」

鬼鮫は鮫肌を納め、ナルトとヒナタも構えを解く。

「それじゃあ、帰る前に兄貴の眼の治療をしようか。」

「いいのか？敵に塩を送るようなまねをして。」

「構わんさ。兄貴には健康であってほしいからな。」
イタチはサスケの厚意を受ける事にした。
イタチは屈み、ヒナタが医療忍術で眼を治す。
「これでいいですか？」
「ああ。ありがとう。」
治療を終え、イタチと鬼鮫は里から去ろうとする。
「じゃあな兄貴。」
「ああ。次に会う時は敵同士だ。」
「そこの鮫顔はともかく、イタチとはやり合いたくないぜ。」
「私もです。」
「・・・オレもだ。お前達と戦わない事を祈る。」
そう言い、イタチと鬼鮫は去った。
「行っちまったか。」
「・・・ナルト君。買い物に行こう？」
「そうだな。」
ナルトとヒナタは買い物に出掛けていった。

サスケは一人黄昏るように空を見上げた。

それから一週間と三、四日後、トモルと自来也は綱手と付き人シズネを連れて帰ってきた。
そして、綱手は五代目火影になった。

邂逅（後書き）

綱手が火影になり、また忙しい任務。
そんな中暗部サスケに出された任務は・・・
次回、探す者・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2743x/

闇夜の友愛

2011年12月11日23時48分発行